

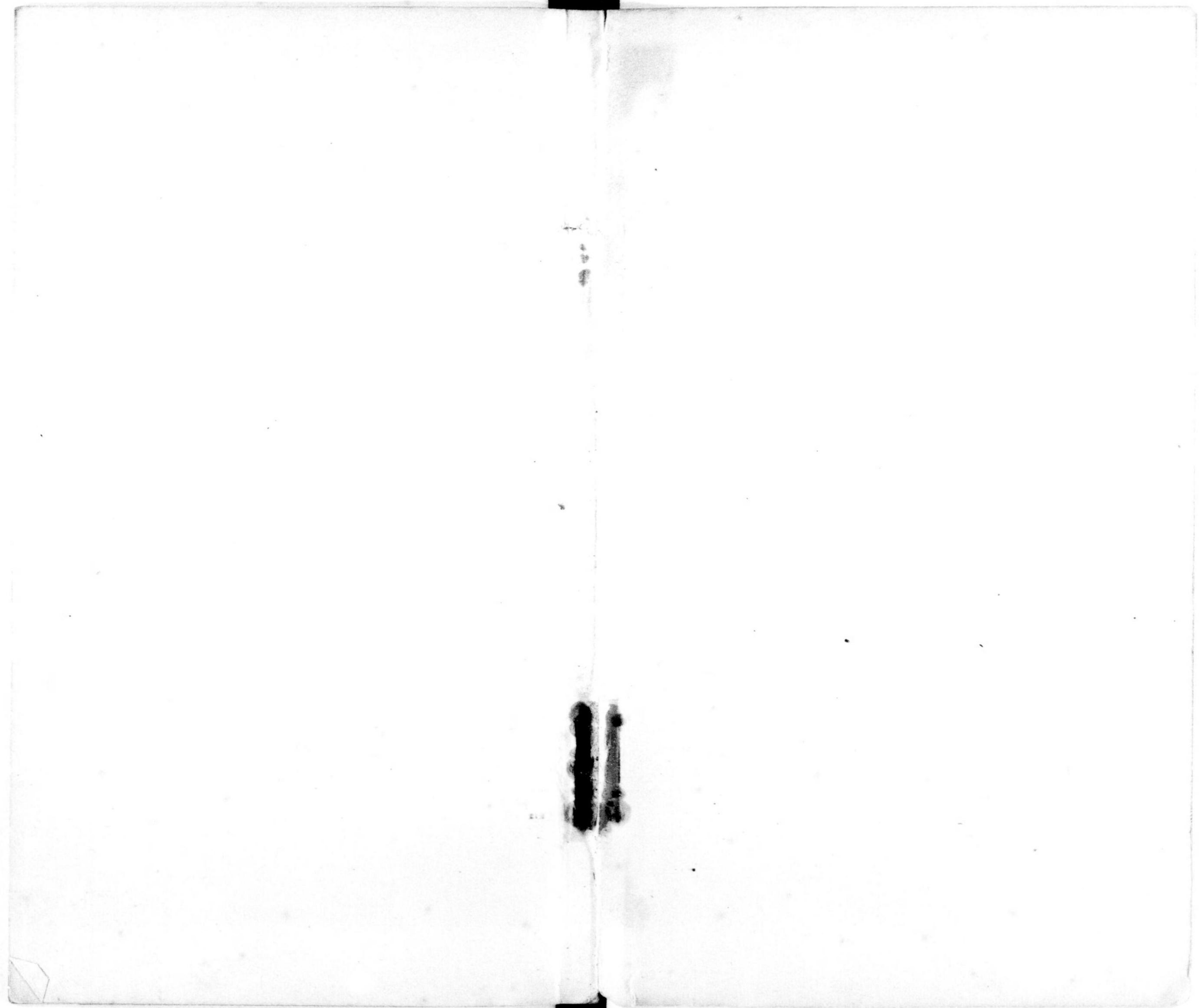
家庭新講談
第四編
木村長門守



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{18m} 1 2 3 4 5

始





特100
397

本
お
書
り
の
巻

山平
2. 7. 8
内交

發刊の主意

一家團欒して、面白く、愉快に読んで行く中に、識らずなく智情

意の發達を助けて行かうとするのが、本書の目的である。

皆知名の文士が熱血を注いで書いたものであるから、確かに我が講
談界に一異彩を放つであらう。

はしおき

沈む夕日の影々しい影を浴びて大段城のうらたて、恰度燈火の消えんとする時、バツと鳴るゝたこが、一、二、三、と数珠の数年間、天守の登に光りを添へた豊臣幕下の勇士の心、を、も、百、も、の、武士をよめたら、誰れも木村長門守重成に抱き寄せ、よめたら、重成はその顔の美しかった如く、その姿の涼々しかった如く、死なぬいた二十三年、武士の生涯を、又花と散らした床しい武士であった。

この花の如き町は、原田の口上は白澤氏、嫡流佐々木六角宰相義郷

兵衛

兵衛
公孫
孫

兵衛
公孫
孫

兵衛

兵衛
公孫
孫



志屋

木村長門守

(堅田の巻)

夢想兵衛

(一)

滋賀の浦、水清き湖水に影を映す百姓家が、彼方に三軒、此方に五軒、
さながら繪に見る風景のやうに静かに散在つてゐる此所江州堅田の里に
質素ながら門がまへ、玄關つき、嚴めしい土塀はなくて、生垣をめぐら

木村長門守

した一構がある。藁葺きながら母屋は相應に手廣く、土藏は無けれど、厩には肥え太つた駿馬二頭つないである。

此の家の主人は如何な人物か、あまり外出はせぬらしく、近郷近在の百姓ども、遂ぞ見かけたことはないと言ふ。いづれは浮世の塵を浦の漣波に洗ひおとして、ながゝらぬ老の身を淨く送る世捨人のわびすまゐであらうと、里の人々は語り合つてゐる。

三日に一度必ず坂本の町まで用達しに出かけて行くのは、仲間姿の若黨である。この家の主人がその昔知行取りの武士であつたことはこれを知れてある。

頃は慶長四年の夏の初め、まだ宵ながら人家まばらな村里は、往來の人も途絶えて了つて、そよとの風も無ければ浦の岸邊に何時もの漣波も騒がず、たゞ露しげき野路の草深く名も知らぬ夏虫がしめやかに鳴いてゐると、昨日今日見えそめた螢の火がチラホラ飛び交ふばかり、犬の遠吠えにはまだ早すぎる時刻、四邊の静けさを破つて、門の戸をホトホトと敲くものがあつた。

表座敷十疊の書院で短檠かき立て、書見に心を傾けてゐる主人には、この物音は耳にも入らぬか、眉根も動かさずに讀みつけかけてゐる。年のころは六十ばかり、撫でつけにした總髪はもう霜をおいて、額には深い

皺しはを刻きぎんでゐる、胸むねを蔽おほふた白い髯ひげ、鋭うとどい光ひかりを放はなつ眼まなこ、何なにとはなしに
四邊あたりを拂はらふ威嚴みげんがある。

やがて仲間ちゆうげんが間あひの襖ふすまを開あけて、

「殿様とのさま、お客人きやくじんでござります」と手てを突つく。

主人あらしはなほも書物しょぶつから眼めを離なはさぬ。

「殿様とのさま、殿様とのさま。」

「お、小源次こげんじか、何なんの用ようぢや。」

「お客人きやくじんがお見えみになりました。」

「なに、お客人きやくじん？」

「はい、お子供衆こどもしゆうと供人ともびととを連れつれました旅たびのお女中ぢやうちゆうが、是非ぜひ殿様とのさまにお目め
通とほり致いたしたいと、斯様かやうに仰あやせでござります。」

「はて、浮世うきよにはもう用ようの無いこの佐々木ささき六角かくに、夜中やちゆう婦人ふじんの客きやく……
して、お名前なまへは何なんと申まをされたか。」

「はい、そのお名前なまへを伺うかひましたら、殿様とのさまにお目通めとほり致いたせば直すぐ知しれま
するものと、斯様かやうに仰有おつしやつていござります。」

「フム、由よしありげな客人きやくじんぢや、兎も角かくも對體たいめん致いたさう、粗忽そこつなきやうお通とほ
し申まをせ。」

「畏かしこまりました。」

木村長門守

小源次は頭を下げて出て行つた。

主人は書物を閉ぢて静かに見臺を側に押しやり、容儀を正して待つ所へ、客人は小源次に案内せられて座敷へ通つた。旅姿の氣品高い上臈で六七歳になる男の兒を連れて、遙か下手へしとやかに座り、

「佐々木殿、お久しぶりです。」

「お、これは珍しい、右京殿でござつたか、遠路よくこそお訪ね下された、さ、すつとこれへ。」

「その後お變りもござりませす喜ばしう存じまする。」

「御事もお達者で何よりぢや。」

一通りの挨拶がすむと、右京の局は膝近く引き添うて座つてゐる子供を顧みて、

「綱千代、御挨拶申上げませ。」

綱千代と呼ばれた子供は、袴の膝に乗せた兩の手を静かに疊について、

「小父様、御機嫌よろしう。」

「ほう、惻發さうな眼つきをしてござるの、常陸殿にそつくりぢや、右京殿、遺子でござるか。」

「仰せの通り、常陸介遺子綱千代でござります。今宵夜中をも憚りませずお訪ね致しましたのは、實はこの綱千代のことにつき、お願ひ申上

げたい儀のござりまして……」

『フム』と主人の佐々木は扇子を膝について相手の顔を正面に見据ゑる。
 『數へれば早や三年の昔、文祿四年の魂祭る七月十五日、關白秀次様高野山にて儂く御生害遊ばされました砌、夫常陸介には主従三世の契を守つて切腹致しましたことは佐々木殿よう御承知のことで御座りませう。その折これなる綱千代はまだ三歳の頑是なき子供でござりましたが、常陸介は膝近く呼びよせまして、教訓致しまするやう、我れ亡き後は母の許にて三年を過し、七歳に達すれば近江に行き、佐々木六角宰相義郷殿を師とも父とも仰いで、天晴れ豊臣家の忠臣となれ、忘れても父が名を

汚してはならぬぞと、斯様な遺言でござりました。何を申しましたもその折はまだ僅か三歳、遺言の言葉もよくは分りませんでござりまするが、側に聞いて居りました妾が、その後は毎日のやうにこの言葉を繰り返して教へ、今日まで暮して参りました。今年早や慶長四年、もう春も過ぎて夏にもなりました故、亡き常陸介が言葉を守り只今連れて参りましたほどに、どうぞ常陸介が臨終の願望をお聞きといけ遊ばされて、この綱千代をば天晴れ武士にお仕込み下さいまするやう、右京改めてお願い申上げます。』

『叔父さま、お願い申上げます。』

と綱千代も母の言葉の尾につけて殊勝げに頼むのであつた。

始終を聞きとつた佐々木六角は、静かに白銀の髯を撫でながら、

「初めて承はる木村殿の御遺言、某はさまで頼まるゝに足るほどの者でもなく、又この年來浮世のことには指を染めぬ覺悟で、斯くは片田舎にわびすまる致して居ること故、本来ならばさる小面倒臭きことは眞平とお断り申す所ぢやが、關白秀次殿とは某別戀の間柄、その執權職常陸介殿とも親しう御交際を願うて居つた……ふム、常陸介殿にはさる御遺言のなされたか。」

「はい、亡き夫の遺言を守り、妻の義務が果たしたうござります。」

「宜しい、萬事は某心得た、如何にも一子綱千代殿の行末この六角が引受け申さう。」

「それでは夫が臨終の願望、お聞きとゞけ下さいませるか。」

「常陸介殿への義理これはいふまでもないこと、又關白殿御家人の遺子を養育するは殿下追善の一つともなること、思ふに依つて、某きつと男に育て、武士に仕立てゝ進せる、したが綱千代殿の一身この六角にお任せ下さるであらうのう。」

「はい、それはもう何事によらず綱千代の生涯は貴方様にお任せ致しまする。」

右京は六角へ禮を述べたその膝を我子の方へにじり寄せて、

「これ、綱千代、今聞きやる通り、今宵からこの佐々木殿が其方のお師匠とも父上ともなつて、其方を天晴れな武士にお仕込み下さることになりました。かね／＼この母が教へておきました通り、今日から其方の仕へるお方はこの佐々木殿をおいて他にはありません。佐々木殿のお言葉はお師匠の御言葉であると共に又父上のお言葉でありますぞ。佐々木殿お言葉に反けば、取りも直さず父上のお言葉に反くことになる、な、綱千代、分りましたか。」

「母様、よう分りました、お師匠様のお言葉はどんなことでも守ります。」

綱千代が疊に手を突いて、子供ながらにも神明に誓ふ決心のほどを見てとつた母の右京は、それでこそ我が子よと、言ひ知れぬ喜びに胸を躍らせながら、又六角に打ち向ひ、

「佐々木殿、この上は何分御教訓のほど宜しうお願い申し上げます。』
と早や衣紋を繕うて歸り仕度に取りかゝつた。

「それでは妾はこれでお暇致しまする。」

「もうお歸りでござるか、旅のお疲れもあらうに何はなくとも一兩日御寛裕とお休みなされては何うぢやな、明日は蒲の景色をでも御案内致さう。」

「はい、御芳志は有難う存じまするが、去年太閤殿下御他界なされましてこのかた、兎角大阪城中物騒しく、妾御乳母として秀頼様お側を片時離れて居りまして心もとなうござりますれば、勝手がましようはござりますれど、今宵のうち大阪まで戻りたう存じます。」

「ふム、大阪城中は淀様すべてを切つて廻はすので、兎角に物騒がしいと聞き及ぶが、御事定めて御心痛でござらうのう。いや、それではお引き留め申すも却つて失禮であらう、さらば御機嫌よう。」

主客は挨拶して、右京の局が起ち上ると、

「母様、」と綱千代は我れを忘れて走り寄り、母の袂に取り縋つた。

「これ、綱千代、お師匠様が見てござります。」

おごそかな母の言葉に、ハツと思つて我れに歸つた綱千代は、母の袂を掴んだ手をバツタリ疊に落して、

「御機嫌よう。」

とそのまま袂別の挨拶にまぎらせるいぢらしさ、右京は思はず母の情に引かされて、綱千代の手を取らうとしたが、武士の妻といふ冷たい言葉が耳元で囁く。

十日あまりの月比良の頂にかゝつて、夜は次第に更けゆく庭の木立に、何所からともなく微風が訪れて、短檠まだく座敷は何となく濕りを帯

びてゐる。

(一)

右京の局の歸つた後、六角宰相は綱千代の傳役として残された二人の郎黨若松市郎兵衛と今岡太兵衛とを庭先へ召して、そこで主従近附の對面を仰せ付けた。市郎兵衛は忠義に凝り固まつた頼母しい武士、勇氣人に勝れて、戦争の進退、腕に覚えある強者である。太兵衛は又勝れたる智者で、大事に出遭つても未で曾て取り亂したことの無い沈着者、二人は常陸介が亡き後、四散になる多くの家來に引きかへ、死ぬまで木村家に

に奉公したいと止まつてゐる、そこを見込んで右京の局が我子綱千代の傳役にと残して行つたのである。

二人の郎黨が庭の切戸から縁近くへ來てうづくまつた時、六角は更に小源次を召し寄せて、家來同士をも近附の挨拶をさせた。

「其方達、事の様子は、大抵察して居るであらうが、關白秀次殿が太閤殿下の御心に逆ひ、高野山に切腹仰せ付けられたその砌、これなる綱千代が父木村常陸介重茲は、家來として秀次殿のお供をせられた。又この佐々木六角は生前秀次殿と別懇な間柄であつた爲め、秀次殿と心を合はせ謀反のたくらみがあつたと讒言する者のあつて、そのため代々續いた江

州の所領を召し上げられ、斯くは浪々の身と相成つて居る。その某が斯く常陸介の一子を引取り養育致すと云ふこと、其方達は深き仔細のあること、思ふであらうが、この六角は最早や浮世に慾の無い隠士ぢや、常陸介が一子を育て、別に某が貫かん何の野心も有たぬ、只だ常陸介が臨終の願望もだし難く、斯くは綱千代が養育を引受けたる次第、其方達もよく其の筋合を呑み込みおけ。今宵から市郎兵衛太兵衛も小源次と共に我が家の郎黨である、何かにつけ小源次と相談の致して忠實に働いて貰ひたい。』

こゝに主従朋輩近附の挨拶もすんで、暫くは夏の夜の空を眺めて縁端に四方八方の物語に時を移し、三井守の鐘の音に促されて、やがて各自寢についた。

明くる日から綱千代は定めて學問武藝を仕込まれることであらうと二人の郎黨は朝早くから起きて何くれと若様のお世話をして居つたが、義郷は一向綱千代を膝近くへ召し寄せるでもなく、小源次を連れて賤しい漁夫の身装をして湖水へと釣りに出かけて行つた。二人は今日はまだ初めての日であるからと次ぎの日が来るのを待つた。けれど次ぎの日もその次ぎの日も義郷は相變らず釣りに出かける。そのうちに綱千代は漸く家に馴れて来て、子供の持前の悪戯を始める。二人の郎黨は氣が氣で

なく、折を見ては綱千代を諫めるが、子供のことゝてそんな言葉には一向耳をかさず、悪戯は日に日に募るばかりであつた。さらば義郷はそれを見て叱るかと思へば、これは又、綱千代が附近の子供を大勢集めて、義郷の書齋を角力の稽古場にして騒ぎ廻はつてゐても叱言ひとつ言はうともしない。

今日は五月五日菖蒲節句のことゝて、綱千代は近所の遊び友達大勢狩り集めて来て、下世話に流行る菖蒲打ちの遊びをして、座敷と言はず書院と言はず、駈けずり廻はつて騒いでゐる。

義郷は今日は釣りを休んで奥座敷で静かに書見を致してゐる。

二人の郎黨は義郷の手前如何にも心苦しく、私と綱千代の傍へ来て、

「モシ、若様、貴方様はこゝを何所とお思召して左様な悪戯をなされます。頑是ない子供とは申しながら、少しは場所柄をお考へなされて下さりませ。若様がその様な悪戯ばかりして騒ぎますと、市郎兵衛や太兵衛は亡くなられた大殿様に申譯がないばかりか、貴方様のことを呉々も頼むと仰せられて歸られた奥方様に、若しお目にかつたら何と申上げてよいか、な、若様、貴方様はお大事な御身体でござりまするぞ、つまりぬ百姓の子供達とは御身分が違ひまするぞ」

市郎兵衛と太兵衛とが右と左から言葉をつくして諫めてかゝると、

木村長門守

「こら、市郎兵衛や太兵衛、私はそのやうなことは聞きたうない、今日は端午のお節句ぢや、お前達も菖蒲打ちをせぬか、これ、この菖蒲刀をお前達に貸さう、さ、逃げよ、私が追つかけて、この菖蒲刀でお前達を唐竹割りに斬り下げてやる。さあ、皆な来い来い、市郎兵衛と太兵衛とが菖蒲打の仲間入りした。」

と早や菖蒲刀を持つて二人に打つてかゝる。

「モシ、若様、左様な恐かしいことをなさるものではござりませぬ。」

「こりや、逃げぬか、逃げぬと私は本當の刀で斬るぞ。」

「モシ、若様、何となされます。」

「何もせぬ、菖蒲打ちするのぢや。」

「モシ若様。」

家來は止める、主人は打ちかゝる、座敷は大勢の子供と二人の郎黨とで、さながら戦争ごつこでもしてゐるやう、あたりは足の踏みどもないまでに取り散らされた。

と、こゝへ小源次が慌たしく駆け込んで来て、

「おい、市郎兵衛に太兵衛、お客人ぢや、お客人がござつた、私は殿様へ申上げて来るほどに、其方達お玄關へお出迎ひをたのむ。」
かう言ひおいて小源次は奥の間へ行つた。

驚いたのは市郎兵衛に太兵衛である。折も折なら時も時、客間がこの通り取り散らされた所へ不意の來客、然も先きに立つて取り散らしてゐるのは若様の綱千代であるから、二人の心苦しき、周章さはどれほどであらう。

『これ太兵衛、私は玄關へお出迎ひに行くほどに、其方若様をお庭へでも連れ出して、チャツと此所を片づけてくれ。』

『お、それは合點ぢやが、若様をお庭へ連れ出して居つては此所の取片付けが出来ぬ、と言つて其方はお玄關へお出迎ひに出にやならず、お乳母さんは居らぬか、一寸手を借りたいものぢやが。』

『乳母さんは今しがたお嬢様をお連れ申して其所等あたりへ摘み草に行かしやれたげな。』

『それは困つた、どうしようぞ。』

『さ、どうしようぞ。』

かう言つてゐる間も綱千代は菖蒲刀を振りかざして子供達と其所らを駈け廻はつて騒いでゐる。

と、客人は案内の遅きに待ちかねてか、ツと玄關を上つて座敷へ通つた。襖を開けて這入る途端、其方へ逃げてゆく他の子供を追つかけた綱千代は、菖蒲刀を振り上げて『お胴ッ』とばかり横なぐりになぐらうと

した所へ運悪く足を踏み入れたものだから、客人はしたゝかに向脛を叩かれた。

「あッ、何となされる。」

と太い聲を出したのは誰あらう、佐和山の城中石田三成からの密使として、今日堅田の佐々木六角を訪ねて来た鎌田六郎親政であつた。

「人違ひぢや、許せ。」

とばかり、綱千代は振り向きもせず、逃ぐる子供を追つかけて行つた。六郎はこの體たらくを見て、苦々しとばかり顔を顰める。市郎兵衛に太兵衛は事の意外にいよゝ驚き、起つても居てもゐられぬほどハラ、

しながら、「若様、若様」と綱千代の後を追うて取り鎮めようとする。

一方小源次の知らせに奥の間を出て座敷へ来た六角義郷は、綱千代の腕白には眼もくれず、まじくと客人の顔を見て、

「石田殿からござつたお使者はお手前かの。」

「いかにも、拙者は石田治部少輔の御内で鎌田六郎親政と申すもの、本日主人石田よりの使として密々御相談申上げたい儀があつて参つた、お差支ござるまいか。」

「佐々木義郷は私ぢや、浮世を捨てた漁師に密々の御用とは何でござるか知らぬが、御覽の通り子供や家來の者ばかり、些つとも氣をおくには

及ばぬ、何なりと仰せられい、仔儀に依つては御相談にも乗らうぞ。』

かう言はれても六郎はなほ四邊に氣をかねながら膝を進めて、

「御相談と申すは餘の儀ではござらぬ。佐々木殿抑も今日の天下を如何に見らるゝぞ。」

「これは異なお尋ね、漁夫に分るものは明日の日和位でござるわ。」

「はゝゝゝ、その御謙遜を拙者主人見込んでの願ぢや。實は見らるゝ通り、今日天下の形勢、動ともすれば世を擧げて關東(徳川家康のこと)に靡かん有様、故太閤殿下恩顧の大小名數ある中に、誰あつてこの形勢を慨かんとするものなく、幼君秀頼公の武威は日々に衰へ行くばかり、

とてもものことに關東方と一戦争して、今にして家康を亡きものに致さねば、太閤殿下の御偉業もあはれ關東の古狸めに撫で崩されんこと火を賭るよりも明白である。これは拙者改めて申すまでもなく、苟も眼あつて天下の形勢を賭、耳あつて東西の物音を聞くものは、皆なこのことを思はぬは無からうと存ずる。」

佐々木は黙して語らず、六郎はなほ言葉を續けて、

「吾等主人石田は夙くよりこのことを心痛いたし、時機あらばと時の到るを待ち居りしが、此度東國の上杉殿には御家老直江山城守を佐和山城に遣はされ、幼君秀頼公に二心なき旨の御誓言をなされたことを手初め

に、西國にては毛利大膳太夫輝元殿、浮田秀家殿、小早川秀秋殿、薩摩の島津殿、佐賀の鍋島殿、續いて立花、小西、吉川、長曾我部の面々、大小合はせて五十餘家、目下大阪へ向けて夫々進發の用意最中でござる。この他吾等主人が諸國へ發したる密使に依つて馳せ參じた浪人野武士、その勢合して十四萬、味方についた國ばかりでも既に二十六ヶ國、これを關東勢に比ぶれば優に二倍の人数、この勢を以て東國上杉家と謀し合はして東西一時にドツと旗上げすれば、味方の勝利は疑ひなく、やがて天下の政權再び大阪の御幼君の御手に歸ること必定、何と佐々木殿、今は正しくその時機ではござるまいか。』

佐々木は黙して語らず、六郎はなほも言葉を續ける。

『そもこの一戦は天下分け目の大事の戦、吾等主人は大事を取りたる上にも尙ほ大事を取り、苟も知謀あり武畧ある武士にして、曾て大阪に縁故ありたる者は一人残らず味方に引き入れたき所存、佐々木殿拙者が密使の旨もう御會得下さつたであらうな。』

六郎は相手の返答如何にと肩を張つて待ちかまへた。その身がまへを義郷は冷やかに見据ゑて、

『いかさま、お使者の旨會得仕つた、石田殿關東の武威を嫉んで旗擧げ致すに依つて、この佐々木六角にも味方せいとの御内意でござらう。し

たが……」

『したが、何と仰せられる。』

六郎は早や刀の柄に手をかけた。

『物の數ならぬ拙者を見込んで石田殿が事の秘密をお漏らし下されたことは義郷忝く存すれど、この旗擧げ拙者思ふに、却つて大阪の勢を殺ぐ不利の戦争と存するに依つて、石田殿のためならば知らぬこと、幼君秀頼公の御爲めには拙者時機を得たること、は思はれぬ。』

『然らば貴殿は利あらぬ戦争と見てお味方下さらぬか。』

『いや、利、不利に依つて義郷は進退する者ではござらぬが、臣下たる

者おのが事を成さんため、敢て主家の勢力を傷けて顧みぬやうな左様な旗擧げには某味方することならぬと申すまでぢや。』

六郎の眼は輝いた、膝頭は思はずデリ、いと義郷の方へ進んだが、義郷は平然として、

『元來石田殿は以前觀音寺の小姓であつたを、故太閤殿下のお眼にとまつて引き出され……』

『佐々木殿、お待ち召され、』と六郎は鋭く言ひ放つた『何と仰せられる、今聞いて居れば、吾等主人は以前觀音寺の小姓であつたと、以前は假令如何なる者にもあれ、只今は佐和山二十三萬石の領主、豊臣家第一の

御家人でござるぞ、』と眼を瞋らし、いざと言はゞ抜き打ちにせんず居合腰。義郷は落ちつき拂つて、

『それは某よく存じ居るが、その二十三萬石の領主となられたのは武功に依つてゝはない。太閤殿下の御座近く常に天下の政事に嘴を容れ居つた功に依つて、言はゞ内證の御加増に依つて今日あるを得たのでござる。』

『な、なんと。』

『まあ、心を落ちつけてお聞きなされ、某は石田殿を恥かしめんとて斯く申すのではござらぬ、凡そ物事には人各々適者がある、石田殿は現在

二十三萬石、豊臣家第一の御家人ではあるが、その二十三萬石には只今申す如き次第にて立身をされたもの、さすれば軍のことには石田殿は先づ不得手と見ねばならぬ、某見る所では石田殿は軍には全く不得手でござる、その石田殿が天下分目の大事の旗擧げなさらうとする。某が申すはこゝの事でござる。石田殿には如何なる謀畧ありてかは存せねど、この軍たゞ大阪の勢を殺ぐ外何の得る所もないと某は言ひ張るのでござる御邊は石田殿股肱の家臣とあるからには、大阪へ對しても、亦臣下であるべき筈、その大阪にとつて不利の旗擧げをする石田殿に諫言するは、御邊股肱の家臣の義務であらう。』

木村長門守

『黙れ義郷、戦争と聞いて氣おくれして、太閤殿下の御恩を忘れ果て、今度の思ひ立ちに味方することを拒むその上に、吾等が主人を小姓上りの、武將にあらずのと、よくも雑言並べ立てた、主人が大事の秘密を明したからには、最早汝ごとき卑怯者を生けおくことならぬ。』

鯉口三寸、六郎は腕の鳴るのを覺えたのである。

『ほう、御邊は某を斬らうと云ふか、それは悪い量見ぢや、折角某が事の道理を教へて取らせたに、若氣の至りにそれを横にとつて……』

『教へて取らせたとは不禮極まる一言、そこ動くなッ。』

聲もろとも六郎が腰のあたり電光一闪、真向に振りかぶつた二尺三寸

の太刀息はづませ、義郷の肩先見がけて、はつしとばかり斬り付けた。

今まで駈けずり廻はつて菖蒲打ちに騒ぎ立つてゐた綱千代は、この體を見て驚かすにはゐられなかつた。他の子供達は早や散り散りに逃げ去つた後、綱千代は菖蒲刀を手につつま、眼を圓うして椽側に突立つた。

六郎が斬りつけた太刀は電光の如く、あはや義郷は血煙の中にドウツと倒れたかと、見る人胸をヤクリとさせた時、彼の時早くこの時遅く、義郷はヒラリと身を開いて、

『不禮者ッ。』

木村長門守

叫んだ聲の裡に六郎は左の肩先したゝかに斬り下げられ、時ならぬ眞紅の花を四邊に散らして其場に墮と倒れて了つた。

大の男が墮と倒れた響きに綱千代は我れにもなく身を揺ぶられて、怱つとなつて眼を舉げた時、死骸を睨んで突立つた義郷の顔の恐ろしさ、綱千代は人の殺されたを見た恐ろしさより、義郷が面相の怖ろしさに一層膽を抜かれたのであつた。

義郷は徐ろに刀の血を拭ひ、元の鞘に納めながら隣室へ聲を走らせて、『小源次は居らぬか、見苦しい死骸片付けよ。』

かう言ひすて、静々と奥座敷へ入つた。後には小源次を始め市郎兵衛

太兵衛、何れも今の騒ぎに顔色を眞蒼にして、

『然しこのお侍も全く運が悪いな、』と太兵衛がいふと、

『運が悪いのぢやない、身から出た錆ぢや、猪口才な太刀を振りまはすからぢや』と市郎兵衛が言ひ返す。

『そりやまあ身から出た錆には違ひないが、猪口才な癖に大事な使者の役目を仰せつかつたのが運が悪いぢやあるまいか。』

など、話しながら死骸を取り片付け飛び散つた血糊を拭きなどしてゐると、奥度敷で六角がバチ、バチと手を叩くのが聞えた。何の御用かと市郎兵衛が恐るゝ伺つて見ると、

「綱千代をこれへ呼べ、」とある。

(三)

以前の座敷へ歸つて來た市郎兵衛は、私と太兵衛を物蔭へ呼んで、

「おい、太兵衛、其方一生の智慧を絞つてくれ、大變な事になつたわ」
物に動せぬ市郎兵衛が聲を慄はせて泣き顔で云ふ。

「大變とは何が大變ぢや、今石田殿の使者が殺されたを目の前に見て、
私やこの上の大變は無いと思ふに。」

「他人の命の一つや二つ拾ふたとて捨てたとて何が大變なものか。殿様

が眼を瞋らせて綱千代を呼べと仰有つたぞ。」

「そなた、それが大變ぢやと云ふて慄へて居るのか、何のことぢや。」

「太兵衛、何のことぢやとは何のことぢや。何時も何事も仰せられぬ殿
様が、今日に限つて若様をお呼びつけなされるは、そら、お客人のござつ
た時あの様な悪戯をしてござつた故、これは屹度若様が嚴うたしなめ
られるに決つた。」

「ほう、それで若様をお呼びつけか。」

「さうよ、ぢやに依つて私はこの様に心配して居るではないか。其方一
生の智慧を絞つて、若様が御叱を蒙らぬやう工夫をしてくれぬか。」

「工夫と云うても何の工夫もないが……おゝ市郎兵衛。」

「何ぢや、智慧が出たか。」

「若様がお悪戯をしたり、過失をしたりするのは、お傅役について居る私等の落度ぢやあるまいか。」

「いかにも、そりや私等が落度に違ひないわ。」

「な、ぢやらう、こゝぢや、殿様が若様をお叱りなさるのは、詮り私等が行きとゞかぬから起つたことぢや、ぢやに依つて、これは殿様の御前へ出て、若様の代りに私等二人を叱つて貰ふがよいでは無からうか。」

二人は主を思ふあまり、他から聞けば愚かしいやうなことを本氣にな

つて相談してゐる。綱千代が悪戯が募つて餘り云ふことを肯かぬ時には、殿様が何所までも放任主義であるからいかぬとさへ思つたこともあつたが、義郷が何時になく言葉を改めて綱千代を呼ぶと、もう二人は我れを忘れて心を揉んでゐるのである。奥の間ではまた手が鳴つた。

「市郎兵衛。」

「太兵衛。」

「どうしようぞ。」

「困つたものぢや。」

二人が起つたりゐたりしてゐると、そこへ義郷の銀の針を植ゑたやう

な顔が又ツと現はれた。

『市郎兵衛、綱千代を連れて参らぬか。』

『はい、只今……殿様に申し上げます、若様がどのやうなお悪戯をなされてお叱りを蒙るかは存じませぬが、若様がお悪戯をなさりますのは……』

『こらく、市郎兵衛、何をうろたへたことを申す、私は綱千代を叱るから呼べとは言はぬ……お、綱千代、其方は其所にゐるか。』

見ると綱千代は椽側の手洗鉢近くに突立つて、譯は分らぬが只だ何時もとは様子の打つて變つた有様に小さい胸を躍らしてゐた。

『綱千代、これへ参れ、其方に言ひ聞かせることがある。』

これまでは別に恐しくないと思つてゐた叔父さんが、先刻あのやうな恐い面相を見せた矢先、今又笑顔ひとつ見せず、叱るやうな調子で呼びつけるので、綱千代はもう義郷が恐い強い怖ろしい人になつて了つた。

『はい、』とばかり綱千代は椽側へ手をついた。

『そこでは話が出来ぬ、これへ参れ。』

『はい、何か御用でござりますか。』

綱千代は恐る恐るにじり寄つた。側に見てゐる市郎兵衛と太兵衛とは、頭から冷水を浴びせられたやうに、息を殺して小さくなつてゐる。

「もう少し進め、一生の心得を言ひ聞かせる。」

義郷は何所までもおごそかな態度である。

「其方は最前の男が何う云ふ理由で私の刀にかゝつて死んだと思ふか。」
綱千代は何とも返答が出来ぬ。

「其方は最初から側にゐて様子は残らず見て居つたではないか。どう云ふ理由であの男が二つとない命を落したか。」

重ねての問ひに綱千代は黙つても居られず、

「はい、どう云ふ理由でござりますか、私には分りませぬ。」
「知らんと云ふか。」

「はい。」

「其方や悪戯はなか／＼達者ぢやが、まだ物の道理を辨へる力は無いのう。鎌田六郎が二つとない命を落したのは、つまり堪忍といふことを忘れたからぢや。」

義郷は一膝乗り出し、やゝ面に笑みを見せ、

「のう、綱千代よう聞け、鎌田六郎は今日大切な使者の役目を持ちながら、此の方が事の道理をわけて話したことに向きになつて憤り、罵られても堪忍すべき所を、若氣の至りに刀の柄に手をかけたからあの様な始末になつたのぢや。其方は最初から事の様子を見て居つたのが幸ひぢや。」

人間は堪忍を忘れるとあのやうな始末となるといふこと、深く心に印しおけ。』

『はい。』

『其方は普通の子供では無い、其方の父木村常陸介重茲は關白秀次公の執權職まで勤めた者ぢやが、惜しいことには秀次公の非行を諫めかねて遂に太閤殿下の御怒りに觸れ、あらぬ悪名を附けられて儂く切腹いたした。其方も本来ならば無事で此の世に永へて居ることの出来ぬ身ぢやが、其方が母は拾丸（秀頼）の御乳母で其方は取りも直さず秀頼公と乳兄弟である所から、上に於ても特別のお思召を有たれたのと、二つには天が

常陸介の最後を慫ませられ、其方をして父の悪名を雪がしめようとなさるゝからぢや。されば其方はこれから成長して天晴れな武士となると共に、上は豊臣家に對して忠義を盡し、一は以て父の悪名を雪ぎ、一は以て其方が武士道を立てねばならぬ、其方が他々の子供と違ふのは斯ういふわけぢや。私は其方が悪戯をするのは何とも思つて居らぬ、何とも思つては居らぬが、家來の諫めには耳を傾けねばならぬ。先日から黙つて見て居ると、其方はこれなる市郎兵衛、太兵衛の兩人が申すことを耳にもかけぬ有様であるが。それは宜しうない。その様に家來を疎畧にしてはならぬ、其方が成人致していざ一身の大事となつた時、其方のために

「命を捨て、働くものは誰れであるか、家來の外に誰れも無いではないか、その家來を疎畧に致すといふことは、決して良き大將のすることではない、是れは序でながら申し聞けておく。」

義郷はこれだけ言つて了ふと、ツと起つて奥へ入られた。

二人の家來はホツと太息を吐き、顔を見合はして只だ嬉し涙に咽ぶのであつた。綱千代は手を突いたまゝ、石のやうに固くなつて、身動きもせず俯向いてゐる。

やゝ暫くして顔を擧げた綱千代は、悔悟の涙をハラ、とこぼし、暫く眼をつぶつて何事かを口の裡で言つてゐたが、その言葉が終ると共に

矢庭に脇差逆手に抜き放つて、

「お師匠様御免、」とばかり、あはや脇腹に突き立てんとしたので、二人の郎黨は慌て、右左から取り絶り、

「これ、若様、何となされます。」

「放せ、放せ、私はこれまで武士の子に恥しい行爲をしたから腹を切つて父上やお師匠に……」

「えゝ、滅相もない、今お死になされては犬死ぢや、今死ぬ命を永らへて、天晴れ武士になつてお主のため戦場で立派に討死なされてこそ武士の子でござります。たつた今殿様が仰せになつたもこのこと。若様の

お身體は決して若様お一人のまゝにはなりませんね。」

二人は右と左から取り纏り、脇差をもぎ取つて涙ながらに諫めたのである。子供とはいへ、伶俐な天性の綱千代は、早くも我が非を悟つて、

「市郎兵衛、太兵衛、私が悪かつた、許せ。」

「え、勿體ない、家來に謝罪は何事でござります。」

「若様が悪かつたとお悟り遊ばせば、市郎兵衛や太兵衛の忠義は立つたのでござります、さ、お肌をお入れなされませ。」

主従は言葉なく、暫くは只だ涙に掻きくれたのであつた。

襖の蔭でこの光景を見てゐた義郷が快げな笑みを漏らしたことを、三

人は遂に知らなかつた。

この後綱千代の行爲はがらりと打つて變り、近所の子供には言葉も交はさず、義郷が釣りに出れば供をして、心静かに糸を垂れながらの老英雄が今昔の物語を聞き、又義郷が居間に籠つて書見をする時もその側に座つて書物に親しむやうになつた。學問に武藝に身を入れ心を籠め、日夜勵み勉める綱千代の上達は、只だく驚くばかり、義郷はこれでこそ育て甲斐があると心私かに喜び、二人の郎黨は行末頼母しく嬉し涙に掻きくれるのであつた。

(四)

慶長五年石田三成等は、大軍を率ゐて、美濃の關ヶ原に東軍を迎へて、天下分目の大戦争をしたが、この一戦は佐々木六角宰相義郷が、曾て石田の使者鎌田六郎に言つたやうに、たい徳川の方にはばかり利を興へるやうな結果になつて、沈む夕日を招き返さんよしもなく、豊臣の武威はこゝに殆んど地を拂ひ、西國の大小名大方は關東の鼻息をうかいふ有様となつた。

石田、増田、長束などと、西軍の諸將はその後間もなく討ち滅ぼされ、

一味の與黨今は残らず誅戮せられて、世は徳川の水勢に逆らう者なく、海内鳴りをしづめて、萬民漸く太平の夢を結ばうとする御代とはなつた。浮世の俗事には指を染めず、唐崎の松吹く風に白髪を波うたせながら、或る時は網を投げ、或る時は糸を垂れ、風流韻事に老の身を養ふ佐々木六角宰相義郷も、寄る年波には争ひがたく、昔を偲ぶ梓弓をおのが腰に張るぞ是非なき。

それに引きかへ、綱千代が生ひ立ちの雄々しさよ。今年十六歳のまだ前髪立ちの若衆姿ながら、筋骨の逞しき、力量の強き、武術の腕の物すごき、學問の業の秀でたる、天晴れこの若武者、やがては大阪城の礎

ぞとは、師匠の最負眼、家來の慾眼ばかりでは無いのである。殊に綱千代が色の白さ、眉の美しさ、口元の男らしさ、義郷が一人娘の今年十四歳になる尾花姫と押し並べたら、差しづめ好一對の内裏様が出来ると、堅田の里の人々は寄ると觸るとに褒めそやした。

義郷は今日も綱千代と小源次とを連れ、堅田から滋賀唐崎の濱邊をのちらこちらと小舟を乗り廻はして、心静かに釣りの糸を垂れて居つた。日も漸く西に傾き、黄金色の光りの征矢が漣波をかすめて流れる時刻となつて、魚は頻りに餌を引き、興は一入増して來た。

「小源次、もう戻らうと思ふ時になつて、魚は名残りを惜しむか、頻り

と餌を引きだしたが、残念なことにはもう酒が無うなつた。酒が無うては興がうすい。其方大義ながら坂本まで一走り頼まれて呉れぬか。」義郷は片手に竿を持ちながら小源次を顧みた。小源次は快く、

「はい、畏りました、それでは殿様一走り。」

と船が岸邊に寄ると早やヒラリとばかり陸に躍り上つて、後をも見ずにひた走り。

此方は六角と綱千代、小源次の歸るまではと、岸邊に寄せた舟を波に流さぬやうにして待つてゐる所へ、暫くすると一人の百姓慌たしく駆けつけ來つて、

『モシ、お殿様、大變でござります、御家來が今あの鏡月寺の悪僧どもにおつ取り巻かれて、踏んだり蹴たりせられてござります。』
百姓が息せき切つての報知に、

『さては、』と驚き突つ立ち上る義郷の袂を捉へた綱千代、

『お師匠お待ちめされ。』

『綱千代、小源次が災難に遭うたげな。』

『それにつきまして綱千代申上げます。相手にこそよれ、たかが鏡月寺の悪僧ばらが狼籍を、お師匠自身御老體を運んで取り鎮めるのは餘りに勿體ない、この綱千代が參つて如何様にも處置をつけます、暫しこれ

にてお待ち下され、』と早や袴の股立搔い取つて駆け出さうとする。

『したが綱千代、只だ何事も穩便に取りはからへ、この六角は今弓取りの身では無いぞ。』

義郷は行かんとする綱千代を呼び留めておごそかに言ひふくめた。

『委細畏りました。』

『行け。』

小源次が災難の場に勇んで駆けつける木村綱千代の何所となく落ちつきある後姿を見送つて、義郷は何事かを思ひ出して快げに頬笑むのであった。

義郷は何を思ひ出して頬笑むのであらう？右京の局に連れられて来た當年腕白盛りの綱千代は、眼のあたり見るが如き雄々しき若武者に生ひ立つた。この若武者は近いうち大阪へ參つて秀頼公に仕へ、天晴れ武士道を立てるのである。その若武者は誰れが育てた、誰れが武藝を仕込み、學問を磨いた、かう思ふと義郷は獨り頬笑ますにはゐられないのであるが、今義郷が綱千代の後姿を見送つて頬笑んだのには、まだ別な意味があるのである。義郷には今年十四歳になる尾花といふ可愛い娘がある、亡き妻の遺子として遺された只だ一人の可愛い娘がある、老の身の男の手ひとつで育てただけに、可愛さは世の父親の百倍である、尾花は父の

眼にも世に稀れな美しい可愛い、そして従順な伶俐な娘である。早く成長させて、良い婿を迎へて、初孫の顔が見たい、喜ぶ孫と喜ぶ娘の顔を見比べて、寂しい老後の生活を賑やかにしたい、義郷は寝ても覺めてもこれを忘れたことがない。綱千代の教導を義郷の右の肩とすれば、尾花の成長は左の肩である、この兩肩の重荷をおろすまでは義郷は殺されても死なぬ。

その義郷は今綱千代が雄々しくも小源次の難を救ひに出かけた後姿を見送つて、不圖尾花のことに思ひいたつたのである、綱千代と尾花、尾花に綱千代――。

「お、私はもう何時死んでもよいわ。」

義郷は斯う思つて快げに頬笑んだのであつた。

「それにしても、昔は轡の音に眼を覺まして千軍萬馬の中を往來した義郷が、斯うも子煩惱になるものか、あゝ私も年をとつたものぢや。」と不圖俯向いた顔はあり、と水面に映つてゐる。白い頭髮、白い眉、白い鬚、額の皺、目尻の皺、肉落ちた頬、一々仔細に眺めた義郷がこの時の感慨はどうであつたらう。

折りしも吹き來る暮近き比良の山嵐、夏なれど襟元に泌む心地して、義郷は思はず身ふるひして眼を閉ぢた。

「綱千代や小源次は何してぞ、遅いことのう。」

(五)

小源次の難を救はんものと、一散に駈けつけた綱千代、不圖見ると、坊主頭に左絢ひの振ち鉢巻締めかけて、麻の法衣の袖を肩まで、裾を膝まで捲り上げた荒法師どもが、さながら獅子が小鹿を攫んだやうに、一人は小源次の襟首引捕へて、右から擲つたり、左から蹴まくつたり、あはれ小源次はこのまゝでは懸て廻り殺しにもされんずこの場の光景を、涼しい眼を瞋らせてキツと覗んだ綱千代、飛鳥の如く荒法師どもの傍へ

駭け寄ると見るや、彼の小源次が襟首とつた坊主を、腰車にかけて腕に
覺えのつばをきめ、「えい、やつ」と絹を裂くやうな氣合もろとも、大地
に潜れとばかり投げつけて、

「あ、いや、方々暫らく、」綱千代は小源次を袖の下に庇つた。

投げつけられた坊主は頭の圓いお蔭で、轉ぶわ、轉ぶわ、七轉八起の
起き上り小法師のやうに、コロコロと轉じて行く道中、鉢巻はスポ
リと脱けてそのまま大地にお茶盆を据えたやう。はて、この法師曾てお
茶盆に縁ありしと見ゆ。けれど流石は惡僧の片割れである、投げつけら
れてコロコロと轉げはしたものの、轉がりとまつた時にはもうムク

リと起き上つてゐた。それでこそ起き上り小法師、頭も幸ひ圓く出來た
り。起き上つた坊主、照れ隠しか、肩を怒らして仁王立ち、けれど眼が
まはるか體はフラフラとよろめくを踏みしめ、

「おのれ、よくも投げやがつたな」と投げられた者の常套文句、聲が大
きいほど見苦しいとは知らぬか、胴間聲を張り上げた。

「蛸坊主、明日の日和でも見て居れ、」と口には出さぬが小源次、痛さを
忘れて小氣味よしと思つた。

綱千代はそんな聲には耳もかさず、

「某は堅田の里に生ひ立てる名もなき小冠者、これなるは今日濱遊びに

召し連れた者、事の起因は存せねど、いづれは此奴が不調法の御折檻と推察致す、なれどもお見受け申した所、各々方は衆生濟度を看板の佛のお弟子、あはれ慈悲の眼に無禮の罪御免しあれ。』

透きとほるやうな麗はしい聲で、水の流るゝやうに言つてのけた面魂、悪僧どもは先づ以て荒膽をひしがれた。

『こりや餘程偉人物ぢやわ。』と誰やら後ろの方で小聲にわめいた。

綱千代が辭に誰れが何とほざいて出るか、さて又事はこれから何うなり行くのかと、小源次は綱千代の袖の蔭で、成行如何と堅唾を呑んだ。と、そこへハソリと出者張つた一癖ありげな奴、橡栗眼をギョロつか

せながら、

『おい、お若衆、顔の美しいのには似ず、なか／＼の荒事師ぢや、お手のうち愚僧トンと感じ入つた。そもそれなる下郎不調法とは申せ、吾等が院主阿闍梨祐海殿御道中を、酒樽提げて横切るさへ不禮と思ふに、何の意趣遺恨のあつたか、先供の一人に酒溺便見舞ひ居つた。如何に衆生濟度の佛門の身でもこれはそのまゝに致しては院主の尊權、延いては一山の名にも係ること、さてこそ以後の見せしめに些つとばかり折檻の致いて呉れたのぢやが、御事が斷りの美事さに、なり難い堪忍を不承して不禮の下郎赦いておませう。したが、この事院主へ聞え上げるに、御事

の名が分らいでは些と取り次ぎ難いに依つて、御事とそれなる下郎の宿所姓名、分明に名乗つて欲しいが何うぢや。

横柄なる坊主が言ひぐさ、綱千代は憤として思はず眉根をビリ、いと動かしたが、尙ほさあらぬ體で、

『早速の御堪辨、先づ以て過分に存する。曩にも申す通り吾等は堅田の里に生ひ立つ名もなき小冠者、名乗れと仰せられては却つて恐縮でござる。なり難い堪忍を不承して肯いて下さるほどの御厚意なりや、その御厚意で吾等名乗りをすることを御免なされい。』

『いやそれは當座の御會釋、その御會釋は却つて禮ではござるまい。』

『さまでの仰せ、辭するも人がましい、然らば申さん、吾等は堅田の里に流寓ふ木村綱千代、又これなるは佐々木家の郎黨小源次。』

『ヤツ、綱千代、あの木村綱千代殿か。』

何に驚いたか彼の男、綱千代の名を口の裡で二三度繰り返して、仲間と顔を見合はせ、辭もなくて此方の顔を惚々とする、山寺には一稚兒、二山王といふ諺があるとか。綱千代を稚兒にせまほしと思つたか法師はら。

坊主どもが橡栗眼の眼尻を下げて、綱千代の顔をしげくと見てゐる時、

「退けや、寄れッ」と大勢を押し分けて、又のさばり出て来る曲者があつた、今度は二人連れ、先きなるは五十あまりのうで蛸のやうな赤坊主、麻の法衣に玉禪して、熊毛の生へた仁王の脚に金剛草鞋をからげつけ、八尺餘りの櫛の棒を大地も割れ砕けよとばかり突き鳴らしてゐる、後なるは之れは又何所の國の人種ぞ、何れも並々ならぬ大男揃ひの中に、頸から上をヌツと現はした大入道、顔は悪憎どもの中でも古株らしいが、坊主になつては日が浅いか、法衣のつけやう、袈裟のかけやうのさても不體裁なこと。

『さては御事が木村綱千代な。この浦の佐々木めが許に隠れ居るとは、浦風のとよりに小耳に挟んで居つたが、はて、珍しい見参よ、』と先きなる赤坊主が唸り出した。『と許りでは合點が行くまいが、吾等は今辨慶と異名をとつた辨覺と申す者ぢや。斯う見えても七つ道具で牛若に斬りかけるやうな殺生は致さぬ。そも御事が父親の常陸介、その又主人の殺生關白秀次は、吾等にとつては宗門の敵ぢや、何故と仰しやれ、先きの年高野山に登つたは殊勝げに見ゆるが、懸て堂塔伽藍をば葦酒と魚肉とで穢した憎き奴、その罰でほどなく切腹して往生し居つた、がその當初吾等が故障の申立てた時、御事が父親の常陸介、眞先かけて吾等に楯つき居つた。これも佛罰觀面で腹切り居つたが、主と親との不心得が子に報

いて、御事今こゝで吾等に出遭うたは百年目ぢや。秀次と常陸介とを取りひしぐことの出来なんだその憾みを、御事の身に報いて呉れるわ。と云うても命を取るの殺すのとは云はぬ、引縛つて御山に連れ行き、三塔七社の寶前、法樂の拍子で舞をまはして、佛敵降服の醜態を山法師どもに囃し立てさするぢやまで。迎も遁れぬ網の雑魚ぢや、覺悟せい。』

赤坊主は憎さげにほざき立てた。その破鐘聲が静まると、彼の大男は吾等が順番と言はぬばかりにヌツと出て、

『代り代りの長談議にお若いの、定めてウンザリしつらうが、吾等が講釋も聽いて貰はにやならぬ。斯くいふは石田殿の御内で其昔さる者あり

と知られ居つた鎌田六郎が弟の軍六ぢや。去る五年の旗上げについて、兄者の六郎は主命を受け、御主が師匠と仰ぐ佐々木めに味方のこと申入れに參つた所、身のほどを知らぬ六角、石田殿を散々罵つたる其上、兄者の六郎を欺し討ちした憎き奴、石田殿は直ぐにも攻め寄せ六角めが素頭討ち落いて呉るところぢやつたが、大事の前の小事を荒立てるは殘念と、無念の齒がみをしたながら赦し遣はしたとは、てもさても命冥加な奴ぢや、今の今、今辨慶の言はしやれた通り、師匠の報いが弟子に降りかゝる因果とあきらめて、吾等と一緒に御山へござれ、七堂伽藍の眞中で尻もつ立たして嗤うて呉るゝわ。』と吐き立て、突立つた。

綱千代の袖に庇はれて成行如何にと見て居つた小源次、「こりや大變な
ことになり居つた。』もう斯うなれば事の起因の自分の命を無いものにし
て目指す悪僧どもを斬つて斬つて斬りまくつて呉れるまでちやと、スワ
といふ時の用意に早や脇差の目釘を私と濕すのであつた。

綱千代は大男どもに取り巻かれても、秋の薄の風に戦ぐほどにも思は
ず、破鐘聲で耳元にわめき立てられても、夏の夕暮の蚊が啼くほどにも
思はず大男どもを一渡り見渡して、

『段々の御講釋、法師の口から承るだけ、なか／＼に有難味の多かつた
が、主親の報いの、師匠が因果のとは近頃聞き捨てならぬ仰せでござる。

そも關白秀次公が山王七社の靈跡を葦酒で穢し奉つたことは、某未だ
顔是なき砌で確とは知らぬが、假令そのことの有つたにもせよ、それは
秀次公の御所存にあつたこと、然らばそれを責める御坊等の平素は如何
身に三衣の尊きを纏ひながら、五戒十戒の一端だも守らず、良民を苦し
めて奪畧を事とし、道に婦女子を辱かしめて邪淫を貪るとの世上の取沙
汰、彌陀のお弟子の御坊等が、まさか左様な不埒は働くまいとは存すれ
ど、世上の人々はそれほどに御坊等を怖れ嫌うて居る。他を責めんほど
の者は先づ我身を責めよ、我身を責める戒めを他に施してこそ初めて佛
道の光りも顯はれる。又軍六どのが兄御のこと、我等が師匠の佐々木殿、

その節石田殿が旗上げの豊臣家にとつて大不利なることを説きたるに、六郎殿は事理を辨へず、不法にも我等が師匠に喰つてかゝり、其上腰のものを抜いてかゝつた故、止むことを得ず斬つて捨てた佐々木殿に露非理があらうかや。但し六郎殿を討つたに相違なければ、兄を討たれた敵として弟の貴殿が敵討ちしようとなら何時にてもござれ、師匠が出會ふまでもなく、斯うして辭を交はしたが縁ぢや、某お相手になり申さう。』と言ひ終ると共に腰なる扇子抜き取り、ばらりと開いて、

『おゝ、暑や、人息れのうるさやのう、』と一足退つて鬢の亂れ毛を左手に搔さ上げる姿の涼しさ、法師どもは又今更に惚々と眺める中に軍六は、

理を以て言ひ返された口惜しさ、

『乳臭い分際で伶俐口の幅の廣さよ、身のほど知らず楯つく心根の憎さよ。御主さほどに強さうな言前するが、定めて要らぬ命を二つ三つ持つて居るのであらうのう。その光る眼が銀紙でなければ、この腰に反うつた氷の鐵は見える筈ぢやに。』と榮螺のやうな拳を固めて、刀の柄を丁々と叩いて見せる。

『ほゝ、物々しい言ひぐさ、吾等とて武士の家に生れたもの、他と相対すれば先づ以て腰のものに眼のつくは、三歳の折からの習慣。して貴殿の業物の反加減、大方お手のうちとは反が合はぬらしく見申したわ。』と

綱千代は扇子を徐かに疊んで腰に差す。

『おのれ言はしておけば——』と軍六は迫き込んで、鯉口三寸切らうとする刹那、綱千代の左手は早や軍六の臂をグイと掴んだ。スワこそ一大事と小源次も脇差の柄に手をかけた途端、

『早まるな、軍六』と一聲。

(六)

鶴の一聲にわやく言つてゐた坊主どもは鳴りを鎮めた。軍六は平げに面膨らして振り向く彼方、乗物の戸を開けて静かに出て来るのは、

これぞ院主阿闍梨祐海。年のころ四十前後、色黒の坊主顔に、襟立ちの緋の法衣をつけ、金爛の袈裟をかけて、右手に中啓の扇を持ち、左手に水晶の珠數をつまぐりながら、黒塗りの木沓を穿いて徐かに歩み来るさま、虫も殺さぬ善知識のやうにも見えるが、此奴坊主の分際を以て、先年石田等旗上げの軍議に加はり、何がな戦功を立て、恩賞の褒美に預からんものと、内々悪衆徒を狩り集めてゐたが、石田の軍早くも破れて、これに興した者夫々誅戮せらるゝ見るや、法衣の襟を掻き合はして念佛面、巧みに關東のお咎めを避けたほどのしたゝかものである、されば鏡月院に於ける彼れが平素も想像するに難くはない、方丈には酒池肉林を

そなへ、御堂の奥に多くの稚兒小姓を養つて邪淫を貪る淺猿しき外道の振舞に晝夜を明かしてゐる。かほどの悪僧よくも娑婆にのさばり居ると思はるゝも不思議ならず、此奴京都大阪に力強い縁者があつて、諸家の待遇も淺からず、それを憚つてか所司代も彼れが振舞を見て見ぬ振りするをよいことにして、榮耀榮華を日に募らせてゐるのである。

裕海しづくくと綱千代の面前に進み、底光りする三角の眼を細めて熟々と綱千代の顔を眺め、にたくと薄氣味悪い笑ひを漏しつゝ、
『綱千代殿とやら、最前より供の者どもが不禮の振舞、定めしお腹も立てられつらうが、物を辨へぬ山猿の人交り、不禮の段は愚僧平にお詫仕

る。斯く申すは鏡月院の院主阿闍梨祐海、御事の父御常陸介殿とは生前二つなき交はりを忝う致いたもの。御事が堅田の里にござると知りなば、迅くに音聞の使者も遣はしたに、知らぬことゝて今日まで御無沙汰に打過ぎた、今日圖らず對面の出来たも、思へば父御がそれとなき御紹介であらう。これを御縁に折節は御登山あれ、浮世を離れた山寺の住居なかくくに興あることもござらうぞ、又此方よりも時々音聞の致さう。さても美しう生ひ立たれたことよのう、御年は幾歳でおざるか。』と又熟々と顔打ち守る。

取りかへ引きかへ、最前からさまぐな坊主がハコ、ハ、這ひ出して來

るので、綱千代は腹立たしくもあり可笑しくもあり、一々尋常に取り合つた日には、まだ幾人のさばり出るかも知れぬ、長居は無益と一通りの會釋して、

『初めてお目にかゝる院主祐海殿、父常陸介と二つなき御交はりと聞いて、今日初めての御仁のやうにも思はれぬが、萬事は再會の折、今日これにてお暇』と軽く一禮して、『小源次行かう』と悠々と立ち歸る綱千代の態度の沈着にして勇氣の据わりたる、祐海初め流石の悪僧ばらも感に打たれて見送つた。

山の端に入り残つた夕日の光りは、湖水の波の上を斜めに流れて、靜かな村里の景色を繪のやうに浮き立たせてゐる。湖水の上に靜かに浮ぶ白帆の數、綱千代は餘念なく數へてみた時であつたのであるが、今は心にそれほど餘裕は無い、師匠の六角が定めて心を痛めながら待つてゐるであらうと、足を早めて小舟まで歸りついた。

見ると六角は何事もなかつた日のやうに、向ふ向きになつて釣りを垂れ、日の暮れるのも知らぬげに見えた、黄金を碎いて撒き散らしたやうな湖水の波に、白髪の老人を乗せた片舟が浮んで居る。

『あゝ、靜かな佳い景色ぢや。小源次見い、お師匠はまるで仙人ぢや。』と綱千代は思はず足を止めて眺めやつた。

「お師匠、只今歸りました、綱千代は舟に乗る前、先づ丁寧ていねいに會釋あしやくした。

「お、綱千代、戻つたか、大分だいぶん手間が取れたやうぢやのう。」

「悪僧あくそうども、入りかはり立ちかはり腑はらに落ちぬ理窟りくつをひねくりましますので、思おもひの外ほかに時ときを移うつしました。お一人ひとりで嘸さぞお寂さびしうござりましたでせう」

「いや、なに、魚さかながよう釣つれたので左程さほどでも無なかつた。時ときに小源次こげんじ、其方ちが怪我けがは無なかつたか。」

言いはれて小源次こげんじは、ハツと平伏へいふくし、

「殿様とのさま、何なんともお詫わびの申様まをしやうがござりませぬ。早はやう御用ごようをと、のへて歸かへらうと思おもひましたばつかりに、石いしにつまづいて酒さけをこぼし、それが起因ちん

であの様な大事だいじになり、若様わかさまにまで飛とんだ御迷惑ごめいわくをかけまして、何なんとも申譯まをしわけがござりませぬ。」

「なんの、その謝罪わびには及およばぬ、委細みさいは側そばに見みて居をつた百姓しやうしの知しらせに依よつてよく承知しょうちして居をる、不埒ふちやう千萬せんな坊主ぼうずどもぢや、義郷よしまとむかし昔日ゆふとの弓取ゆみとる身みなら、悪僧あくそうども片端かたつばしから斬きり捨て、呉くれたのぢやが、浮世うきよを捨てた漁りう夫しに人殺ひところしの殺生せいしやうも出来できぬでう。したが綱千代つなちよはよく私わしの命令いのちづけを守まもつて堪忍かんにん致いたした。萬事ばんじその心こころを以もつて此この後事のちごとを致いたせ。さあ、もう徐々そろそろ歸かへることによしやう、嬢ぢやうや乳母うははが嘸さぞ待ちくたびれて居をることぢやらう。」

主従しゆうじゆ三人さんにん打ち連つれて、廳やぐらで野路のろを語り合あひながら家路いんせについた。

(七)

皎々と冴えわたる月影が涼しさうに流れ込んでゐる座敷で、義郷は今日の獲物の鯉や鮒を肴にして一盞を傾けてゐる。側らには綱千代と尾花姫とが侍してゐる。

義郷は飲み干した盃を綱千代に與へて、

『其方も今日は大分疲れたぢやらう、草臥れ直しに一盃傾けたがよい。これ、尾花、綱千代に酌して進せい。』

父は何心なく酌せよと命じたのであるが、尾花姫は何となく胸が躍つ

て、銚子持つ手がワナ／＼と打ち慄ふ。素よりまだ十四歳の、戀といふこと知る年齢ではないが、母なく、兄弟なく、たゞ老いたる父をのみたよりと思ふ尾花には、五歳の年から一緒に育つた綱千代が、血を分けた兄でないのが怨めしいほど心のうちでたよりに思つてゐる。此方はそれほどたよりに思つてゐるその綱千代は、何所までも師匠の愛嬢として禮儀を以つて向つて来る。『禮儀は他人行儀の隔てある仲のこと、何故綱様は我身を妹として叱つたり教へたりして下さらぬであらう。』今も今とて父が尾花に酌せよと命ずると、綱千代は衣紋を搔い繕うて兩手に盃を支へ、目八分に受ける堅くるしさ。そしてまあ眉根を少し動かすでもなく、

口元に笑ひを浮べるでもなく、尾花が注いだ酒を、苦い薬でも飲む時のやうに、思ひ切つて只だグ、イ、と飲む。

尾花は小さい胸で斯んなことを種々と思ひ續けてゐると、

『尾花。』と義郷は優しく呼びかけた。

尾花はハツと我れに返つて、

『はい、』と、しとやかに手を突いた。

『酌は綱千代に頼むほどに、其方奥へ行てもう寝んだがよい、乳母も獨りで寂しからう。』

尾花は夜の更けるまでも斯うしてこの座敷にゐたいとは思ふが、父が

退れといふを厭とも言はれず、

『はい、』と優しく返辭して、静と銚子の柄を綱千代の方へ向け、挿頭の花の銀簪からりと音さして二人の方へ會釋なし、心残る袖の移り香疊に残して徐かに奥へ入つた。銀色の月影流れて、相對せる師弟の横顔を照らし、座敷は寂として暫くは物音だに聞えない。

沈黙そのものが語るやうな低い聲で義郷は、

『近う、』と綱千代を膝近う進ませ、

『さて綱千代、今日の争鬭について、御山の悪僧ども此のまゝでは濟ま
すまいと思ふが、何うぢや。』

義郷にかう言ひかけられて、綱千代は膝を進めた。彼れは先刻から此の事を言ひ出さうと思つてゐたのだが、側には何事も知らぬ尾花がゐたので、小さい胸に今日の騒動を聞いて何んなに驚くかと、それに氣を兼ねて黙してゐたのである。

『さればお師匠、多勢を頼んで悪事を働く悪僧どもでござりますから、屹度何のやうにかして返報をするに相違ござりませぬ。』

『其方も然う思ふか。』

『それに就きまして綱千代お願いがござります。』

『願ひとは、義郷も膝を進ませた。』

『されば、先んずれば他を制するに依つて、綱千代是れより山門に乗り込み不法の奴ばら根だやしつて、界隈の百姓どもを安堵させて遣りたいと存じまする、殊に彼の軍六は愚かにも兄が理不盡の振舞を思はず、一途にお師匠を仇敵とつけ狙ひ居りますれば、此後ともに御遊行の御先々、綱千代心もとなう存じまする。さればこの儀御許し下さらば、明日とも言はず今宵にも山門に乗り込み……』

綱千代が覺悟のほど確かに見てとつたが、義郷は頭を横に振り、

『したが、それはならぬ。』

『とは又何故でござりまするか。』

『されば、其方が身體には、豊臣家の礎となつて武士道を立て父の悪名を雪ぐといふ大任がかゝつて居る。物の數にも入らぬ山寺の坊主どもと果し合ひをする安い命は其方には無い筈ぢや。又先んずれば他を制するといふは、戦ひの奇勝を希ふ血氣の勇ぢや、采配取るべき武士の所爲ではない。山門の衆徒幾百幾千押し寄せ來るとも、私は少しも怖れはせぬ、先んじて他を制せんよりも、後れて他に制せられぬ用意を致して置かうと存する。そこで、斯様なことを申すと、其方は師弟の情誼が薄いと定めて怨むであらうが、私には少々考ふる仔細もあれば、其方一先づ此の家を立ち退いては呉れまいか。』

義郷に斯う言はれた綱千代は我が耳を疑ふほどに驚いた。

『何と仰せられます。』

『さ、その驚きは尤もぢやが、今も申す通り私には思ふ仔細のあることぢやから、怨まずと何卒立ち退いて呉れい。』

やゝ暫く綱千代は俯向いて黙してゐたが、やがてキと振り上げた顔には、ハラ／＼と頬を傳ふ涙。

『お師匠に辭返すは綱千代身を切る思ひにござりますれど、前後生涯のことばかりは辭を返します。目前に迫つたお師匠の難儀を餘所に見て、何う此の家を立ち退くことが出來ませう、母右京に連れられ初めて

参りし時母に申し聞かされたること今も忘れは致しませぬ、私にとりお
師匠であり父上でありお主であるものはお師匠貴方でござります、その
師匠の難儀を知りつゝ、私に立ち退けとは、餘りにお情ないお言葉でござ
ります。』

師を思ふ武士の赤誠の涙を綱千代は惜氣もなく流すのであつた。

『其方がその怨みの言葉を聞くは初めより承知で私は申して居る。した
が綱千代、一旦の恩義と祖先數代の主家とは何れが重いぞ。其方が私を
師と仰ぐは一旦の恩義ぢやが、豊臣家は其方にとつては二代の主家では
ないか。殊に又私の難儀と申したとて、それは山寺の坊主どもが攻め寄

せて来る位のこと、命を的にするほどの難儀ではない。のう、この所
をよう聞き分けて暫く立ち退いて呉れ、私が所存のほどは臆て分ること
ぢや。合點が参つたか。』

斯うまで言はれては、最早や綱千代には言ひ出すべき言葉は無い。

『は、はい、』彼れは涙と共に手を突いた。

『承知致して呉れたか、それは忝い。出立は明日早朝と決め、今宵この
残んの酒で、一家打ち寄り暫し別れの盞を酌まうぞ。小源次は居らぬか。』
『はい、』と應へる小源次の聲に先立ち、庭の籬に時ならぬ旋風か、カサ
いゝと生垣の戦ぐ音。合點ゆかじと縁側に馳り出た義郷、それと見た綱

千代は早や庭に飛び下りた。

『綱千代、造るな。』

『お、』と應へて發矢と撃つ手裏劍、月光を縫うて電光の如し。

ウーンといふ呻き聲と共にバタリと黒いものが生垣の外に斃れた。

『やッ、去なしたり、逃げ居つたか、』と義郷は月影に老眼見開いて斯う叫んだ。

と見ると、月影の蒼く流れた野路を彼方へ一散に逃げ行く黒點ひとつ。

『曲者は二人であつたぞ、』と義郷はなほも彼方を睨んで突立つた。

垣根の外に斃れた曲者は、市郎兵衛、太兵衛の二人が擔ぎ入れた。覆

面こそしたれ、風體こそ變つたれ、鏡月院の悪僧が間諜兵なること、その頭の圓いのが何よりの證據。綱千代の撃つた手裏劍は頸動脈を斜に貫いて、美事に息の根を絶つてゐる。

(八)

さても義郷が十年愛育薰陶した綱千代を、仔細も語らず膝下を立ち退かせるについては、深い深い思慮があるのである。

山門の衆徒は、佐々木を兄の仇敵と狙ふ軍六に煽動せられ、且つは又年齢もゆかぬ綱千代に坂本の町で散々論り込められたことを遺恨に、何

時かは押し寄せて仇するに相違ないと思つた義郷は、その山門の衆徒を引き受けて戦ふ手段は充分にあるが、所詮多勢に無勢、假令一度や二度は追拂ひ、蹴散したればとて、卑怯の振舞を恥辱と思はぬ衆徒等は、闘討ち、待ち伏せなんどの卑劣手段で、何所までも義郷が命を奪はねば承知しまい。人生七十古來稀れなりと言はれたその七十ちかく生き延びた命、今捨てるとて更々惜しいとは思はぬが、只だ不憫なるは娘の尾花である。盛りに近き花を萬一悪徒の手にかけるやうなことがあつては、冥土で亡き妻に合はす顔が無い。されば綱千代に覺悟のほどを言ひ聞かせ、尾花を連れて大阪なる右京の下まで立ち退かせんかとも思つたが、死す

る覺悟を打ち明けては、あの綱千代が何として承知をしよう。如かず、綱千代を先きに立たせ、後より郎黨して尾花を送りといけて委細を打ち明け、後事を頼まんには。義郷は斯う覺悟を定め、先づ綱千代出立のことと承知させたのである。

一樹の蔭の雨宿りに、二言三言もの云ひ交はしたばかりでも、袂別は惜しいが人情のならひであるに、これは又十年近う、父と敬ひ、子と愛し、兄と慕ひ、妹といつくしんだ義郷、綱千代、尾花、さては郎黨小源次、市郎兵衛、太兵衛、何れも熱湯を呑む思ひに別れの盃を酌み交はした。

頃は慶長十三年、夏も終りに近き八月中葉、曉の軒に雀の二聲三聲鳴き出した時刻、家人一同に送り出されて、玄關に武者草鞋の紐結ぶ綱千代、編笠の紐は道中無事を祈りつゝ尾花がくけたとは知るや知らずや。
『右京殿へ宜しく傳へて呉りやれ。』

『さらばお師匠恙なう。』

『道中随分お氣をつけて。』

『落ちついたらば直ぐにおたより。』

『どうぞ御安否早う知らせて。』

言ふも涙、言はるゝも涙、擡げ得ぬ顔に編笠眉深に打ち被り、さらば、さらばと立ち出づる門の口、小源次に市郎兵衛、太兵衛、せめては坂本あたりまでお見送り申さんと言ふのを、綱千代は強ひて思ひとゞまらせ

て、
『今更云ふまでもなく其方達はよう心得てゐるであらうが、昨日のことより山門の衆徒等、何時かはお師匠に仇するに相違ない。市郎兵衛、太兵衛兩人を残しておくは、その時我れに代りて恩師の馬前に天晴れの働きして貰ひたいためであるぞ。又小源次も此上共にお主大事に奉公致せ。』
かう言ひ聞かせて、互ひに見送りつゝ見返りつゝ、早や薄靄に隔てられて姿は見えずなつて了つた。

綱千代の姿が薄靄に隔てられて見えなかつた時、此方二階の小簾の裡で、よよとばかりに泣き伏したのは、涙の露に縁深き名も尾花姫、附き添うた乳母も何と慰めん言葉なく、共に涙にかき暮れた。

(九)

朝まだき、滋賀の浦灣に波枕、鷗の夢さめて羽ばたきするを編笠の蔭に眺めながら、初旅の武者草鞋軽く辿り来る木村綱千代、振り返れば、鶺鴒晴れた朝景色の裡に、名残惜しき恩師の家は、一叢しげき夏木立に遮ぎられて早や見えぬ。

『御老體つゞが無う在せ、尾花どの又逢ふ時節もござらうぞ。』綱千代は編笠の縁を翳し上げて、口の裡で念ずるやうに斯う言つた。

名残はつきじと、聽て思ひ切つて歩き出し、坂本の町近い小松原にさしかゝると、

『綱千代どの、その甲斐々々しい修業装束見ま欲しう、先刻から大分待ち草臥れたわ。』

唐突に斯う言つて、ヌツと面前に現はれた澁染め法衣の大入道、同じ装束の悪僧五人従へた。

綱千代はキと睨まへて突つ立つた。その顔眺めて大入道ニタ、と薄

笑ひしながら、

『昨日坂本で御事を見初めた院主阿闍梨、氣の早や、是非に今日御事を迎へ來よとて、吾等に厳しい命令ぢや。見られい、御乗駕までチャツと用意して參つたによ。』と又ニタ／＼と薄笑ひする。

綱千代は抜き打ちに前なる二三人、手も見せぬぞと一旦は心が逸つたが、待て暫し。昨夜の曲者、一人は我が手裏劍に其の場に斃れたが、一人は辛くも逃れ居つた。彼の悪入道、それが口から我が今日の旅立を聞き知つてこの奸計か。豫ては單身乗り込んで、悪草ならぬ悪僧の根だやし致し呉れんとさへ覺悟したものの。乗駕持參で迎ひに來たとは面白い。

此所に居並ぶ奴ばら斬つて通らんはいと易けれど、それでは彼等が憤りの薪に油をかけるも同じで、その憤りを恩師に持つて行くは知れたこと。所詮一度血を見では濟まぬ事の成行、此方先んじて手を出しては師の命にも背け、これほどに仕かける喧嘩を避けて通れとまでは仰すまい。謀計に乗つたと見せてその裏を掻き、坊主頭に湯氣の立つほど目にも見せて呉れよう。いでやと綱千代臍を固めて莞爾と笑ひ、

『昨日の見參に今日の御迎ひ、院主のお心の早いには綱千代ほと／＼感心仕つた。某もとより浪々の身、何所を住所の定めもなければ、駕輿に乗つて食客に行くも近頃風變りで面白い。まだ三塔七社の順拜に後生を

たのむほどの年齢ではなけれど、院主昨日の仰せには、淨世離れた山寺住居もなか／＼に興あることゝあつた。さらばこれより直ちに参らん、御厚意の乗物遠慮なく拜借仕らう。』

はつと應へて昇き寄せる駕輿へ、綱千代は草鞋も解かずにドツカと大胡座、途端にバツタリ閉てる駕輿の戸へ、綱千代は手早く小柄を嚙まして萬一の用意。

駕輿の外では大入道が、それツといふ聲に『してこいな』と昇ぎ上げる人足の威勢よき掛聲。

さても虎口に這入つた綱千代が身は何うなることであらう。

午近く坂本の町へ用達しに來た小源次は、宙を飛んで馳せ歸り、

『殿様、大、大變でござります、』と言つたまゝバツタリ倒れて了つた。

聲に驚いて駈け出した市郎兵衛と太兵衛、水よ薬よと介抱して聽て息を吹き返した時、義郷は靜かに其所に立つてゐた。

『小源次、氣を確かに持て。』

小源次が坂本の町で人々の噂するを聞き、宙を飛んで歸つて來た一伍一什を聞き終つた義郷は、暫くの間黙して語らなかつたが、聽てツと居間へ這入ると、

『太兵衛、参れ、』と鋭く呼んだ。

この夕暮鏡月院の納所には、新參の飯焚き男が忠實やかに立ち働いて居つた、そしてその男の顔は太兵衛に瓜二つであつたことを讀者はこゝに記憶してゐて貰ひたい。

(一〇)

昔者空海上人虎の巻と題する一卷を認めてその第一條に、
凡そこの山にて修道の意地を勵まん徒輩は、念者は生涯に若衆一人、若衆は一生に念者一人、その他には止觀の窓をかたく閉して、眞俗不二に、ゆめく浮氣ぞめきの恪氣喧嘩あるべからず、あなかしこ、あ

なかしこ。

斯う書き記したとは後世下世話の口啤である。嘘か真か、今はその空海が肉筆の虎の巻は、何所の寺の寶物としても残つて居らぬから、確と受合ふとは申されぬ。

それは兎もあれ角もあれ、佛門の身、權妻を有つことの出来ぬ宗派にあつては、又夫々の工夫を凝らしたことだけは、これで想像することが出来る、定に入つたほどの高僧善知識でも、矢張り肉慾の苦悶とやはしたゝかに嘗めたげな。況し末世末法の俗入道は、虎の巻の第一條、あな有難しと、眞先かけて讀誦するであらう。

昨夜間諜を出して、綱千代が今朝旅立ちのことを聞き知つた祐海入道早速抜目なき手下の悪僧七八人に用意させ、坂本の町はづれに待ち伏せさせたが、首尾や如何にと起つたり居たり、里から山へ花嫁御でも迎へるやうな量見で、只だ心待ちに待つてゐる。

やがて物見の者の注進で、乗物が坂道に見えたと聞いた破戒僧祐海、堂々舞ひして大歡び、早速護摩堂を開いて文珠の尊影に御燈明かゝげ、つひぞ無い抹香燻べて遍照金剛、藤色紋紗の華やかな法衣に、金爛の輪袈裟をかけて、煩惱即是菩提樹の念珠爪繰る殊勝面、天井裏の鼠族もキ、と笑つて跳ね廻はつた。

豪毅の綱千代が虎穴に入つて虎兒を獲んとする覺悟あるとは知らず、山門へ來ればもう此方のものと大喜悅の祐海、それ御草鞋の解き手は誰れ、洗足の汲み方は彼れと、御堂から方丈、方丈から納所と、自分自身駈けずり廻はつて世話をやき、失敗してこの客人の御機嫌損じた奴は、誰れ彼れの容赦なく檜棒の折檻ぢやぞと、尖り聲で怒鳴り立てた。その以前、石田三成に味方して、廳で關ヶ原へ一山の衆徒が繰り出さうとした時でも、これほどの騒ぎは持ち上らなんだと、寺男や強力どもはぶつくさ言ひながら、今朝からてんでこ舞ひして働いてゐる。それだけに綱千代の乗物が大玄關へ横着けになつた時には、院内院外ドツといふ鯨波

の聲を擧げるほどに騒めき立つた。

『これはく、ようこそござつた。』と祐海は式臺まで下り立つて迎へる乗物からスツと現はれた綱千代は、武者修行の甲斐々々しい出立、編笠小脇に掻い取つて、スツクと起ち、

『お出迎ひ御苦勞に存ずる。』

やがて祐海は綱千代の手を取らんばかりにして客座へ招じ入れ、

『やれく、如何かと案じたに、ようこそお出で下された。昨日は途中のことゝて、いかい不禮の致いた。そのお腹立ちもなく快う御登山下されたこと愚僧何より以て本望でおざる。昨日歸山致いてより早速辨覺、

軍六等を召し出し折檻の致いたる所彼等も甚う前非を悔みて、今日にもあれ綱千代殿ござらば、降參の申入れると云うてござるわ。いやもう見かけばかり強さうにしたがるたわいのない奴等ばかりぢや。どうぞ御事もお心易う思して、暫く此所に御滞在なされい、打解ければ彼等も良い友達ぢや、はく、何の彼のと此方申すことばかり……途中定めて暑さに苦しめられたでござらう。こりや、誰れぞ來てお客人に團扇參らせい。』

『おゝ。』と應へて稚兒一人摺り足に出で來り、天狗の羽團扇しなやかに綱千代を煽ぐのであつた。

暫くすると稚兒小姓が入り代り立ち代り、目八分に捧げて運び出す山海の珍味、納所坊主が不思議がりながら料理したほど、どれもこれも精進料理である、山門に精進料理は何の不思議も無いのであるが、それがこの寺では不思議なのである。

赤山の松露も出た、大原の欸冬も出た、北谷の凍蒟蒻も出た、堅田の豆腐の冷奴には、無動寺の山葵のおろしがついてゐる。

「斯様なもの、何の珍しうもござるまいが、山寺の料理の浮世染みぬ所を取柄に一盞お受けなされい。」と祐海は眼を細うし、口をつぼめて盞を差す。

「酒は某至つて不調法、どうか某にお構ひなく。」

「これは又きつい御遠慮、折角お出で下されたに、ま、ま、ひとつ。」

綱千代は餘り自分の身を護り堅固にしては胸中を覺られぬとも限らぬと思つて、

「それでは、おひとつ頂戴仕らう。」

小姓の注ぐ銚子八分に受けて一口に呑み干し、「いざ、御返盃。」

「これはお美事」と祐海、この盃天にも地にも替へがたしと押し戴く。他の見る眼が無かつたら定めて差上げて小躍りしたのであらう。

追々と手下の坊主ども招伴に参り、座敷は早や坊主頭でテかゝいと照

り返されるほどの大繁昌。何れも祐海が下へもおかぬやうにする綱千代を、大事の大事の客人とあがめ、何ともあれ此の客人の御意に入らうと、盃一つ二つ傾けると早や我れから酔うた振りして、坊主頭をパチンと叩き、濁聲張り上げて唄ふもあれば、瀬戸の田吾作が蛙を踏みつぶしたやうな腰つきして踊るもある。可笑しくもないに噓し立て、座を賑はし、客人の顔色如何にとチロ、と眺める賣僧らが心の淺猿しさ。綱千代は見るだに胸わるしと、起たんとすれば、『お小便か、』『お大便か、』と、三五人バラ、と付き添うて来る。

『某、静かなる所にて暫く休息致したうござる。』

『然らば何卒こちらへ、』と北向きの廣やかな方丈へと案内する。夏ながら肌は比叡の山風ソ、と吹きわたり、こゝ三界の苦を知らぬ別世界見廻せば襖、突立、調度、什器のさても驕奢を極めたることよ。

日も落ちてやがて蘭燈の影うすく、夜は次第に更け渡る。綱千代はイヤと言は、跳ね起きん身支度萬端手落ちなく、枕の下に大小の提緒を敷いて、静かに寢床に這入ると間もなく、二間三間隔てた彼方と覺しき邊で怪しき物音コトリ！ 人か、鼠か？

綱千代は枕元の刀私と掴み、頭を擡げて聞耳そばだてた。やゝ暫し、物音は再び聞えぬので、枕につくと又コトリ！

『さては……』

綱千代は態と蘭燈を暗うした。

(一一)

當時大阪城内にて右大臣秀頼公の内後見として、飛ぶ鳥も落すほどの勢力ある長曾我部宮内少輔盛親が、曾て關ヶ原の一戦後暫く京都に流寓の身であつた頃、その甥に當る同苗鴉之介といふがあつた。幼にして父母を失ひ、叔父に寄人の身であつたが、この鴉之介女にして見たいほど容姿の整つた可愛らしい稚兒であつた。一日叡山の供養の節、亡き兩親

の回向のためにもと、乞はるゝまゝに供養日の稚兒に出した所、何所で何う見初めたか彼の鏡月院の院主阿闍梨が、翌日早速使者を以て申入れたには、『盛親殿石田方として關ヶ原に出陣せられたるため、現在の浪々寔に同情に堪へぬ。御許に在る鴉之介殿御身が現在の浪々にては差當つて仕官もなり難からん。當分拙僧方にて讀み書きの稽古なりと致されては如何に』と、盛親もこの時は剃髮して入道になつてゐたから、願つたり叶つたりと、二つ返辭で山門へ送り届けた。この時鴉之介は十三歳、今年十七歳までの四年の間には、見る眼も醒めるほどの若衆に生ひ立つたので、祐海が寵愛一方ならず、氣隨意氣儘に振舞はせ居る、それさへ

あるに、先年叔父盛親が召し出されて現在の内後見役、その勢をも笠に被て、一山三千の衆徒も眼中になき氣位の高さ、譬へば三間の大床一ばいに肩幅を擴げた春紅梅の、のさ張つた枝に手も附けられぬ厄介物、祐海も今となつてはほとく、持て餘してゐるほどである。

昨日京都から歸山の途中云々と、綱千代が若衆姿の美はしきに祐海が眼を細うした一條を、尾に鱗つけて坊主どもが語るを聞いて、や、胸に火焔を燃しかけてゐた矢先、矢も楯もなき祐海が今日の迎へ取りに、淺猿しや、嫉妬の薪に火の手は十二分に廻はつた。晝間祐海から「其方に好い友達が出來うぞ、座敷へ來て客人のお相手せい」と言はれた時には

我れから我れをひがみて、「この鴛之介が顔にそれほどまでに泥を塗る魂膽か」と、碌々口も利かず、果ては夜具取り出して、卑女のするふて寝といふに今日一日を過して了つた。世に武士の子といへば三歳にして軍談に耳打ち傾けるが習であるに、十七歳の今日鴛之介は太刀打ちの修業をするではなく、腰には大小たばさんだれ、抜く術とては叔父の許にあつた時居合抜きを少し習つたばかり。この山門に來て後は、蘭麝の香りを袖に罩め、法樂の拍子に舞ふ舞踊の面白く、何時か心も薄化粧に、祐海が寵を一身に集め、一山に我儘を咎める者の無いを、天晴れ武士の子の出世とも心得居る腐腸漢、女偏に書く油臭い嫉妬の文字を、身にも心

にも浸みわたらせ居るも、或は至當と言はれるかも知れぬ。

鴉之介は今日一日をふて寢の床に怨み過したゝめ、夜に入つて、橡栗ほどに眼が冴えてどうしても眠られず、いや増す心火の熱度に轉々反側して、『この怨恨、どうしても呉れよう』と、出るほどの智慧を絞つて慮へついでた。

何時もなら華やかに見える我が居間の蘭燈も、今宵は心ありてか薄暗く、何をか怖ろしいこと仕出來せといふ意味を語るらしくも思はれる。今一陣の山嵐がザアと軒端を掠めて通つた後、更け渡る夜の山寺の寂寞子の刻の鐘の音陰に響いたも早や先刻、もう世界は草木も眠る丑滿時に

ほど近い。

『鴉どの、ゐやるか。』

相談相手、力かす人欲しいと思ふ矢先、我が名を呼ぶ聲、鴉之介はガバと床上に起き直つた。と見ると、日頃千束の艶書にとやかぬ戀を煩く附き絆ふ毛虫のやうな軍六が、部屋の入口に立つてゐる。さりとは又情ない。

『軍六どの、この深夜に何御用、吾等今宵頭痛のしてこの刻限にも寢つかれず、もの言ふも煩はし、應接迷惑でござる、』と劍もほろゝの挨拶に、『こりや、聲が高い、』と軍六先づ手を舉げて制して、

木村長門守

『その頭痛の種も俺はよう知つて居るわ、知つて居りやこそ斯うして親切に訪ねて來、事と品とに依つては一肌も二肌も脱いでしつぱり、いやさ、力にならうと思つて來たに、さうもぎどうに言うたものではないわい。』

言はれて鴉之介は不圖胸に浮ぶ一案、

『これは悪かつた、容して下され、むしやくしや紛れにツイ口一杯言うてのけた。したが軍六どの、今聞けばこの鴉之介の心を察して、何とか力を籍さうとは、それは真か。』

斯う言つて一膝進める時、隣りの部屋でコトリ！ 二人は氣がついた

か、つかぬか。軍六は口頃戀ひ焦れる鴉之介と、夜更けに膝を交へての話が先づ小躍りするほどに嬉しく、こゝ暫く世界に息の通ふものは鴉どののと俺れとの他になしと云ひ顔に、

『先づ其方に問ひたいは、院主があのような振舞を、其方この後そのまゝにして置きやる氣か。』

『されば、吾等とてこれほど顔に泥を塗られては。』

『そのまゝには濟まされぬとな。さ其所ぢや。斯う云ふも些と失禮ぢやが、その、そのまゝに濟まさぬ手段は其方獨りでは荷が過ぎよう。』

此の時又隣りの部屋でコトリ！ 鴉之介は小耳をそばだて、

『軍六どの、今の物音は。』

『今の物音、は、鼠ちやわ、鼯ちやわ、たつた今俺が来る時厳しう其所等見廻はつて来たによ。』

『でも、心得がたい今の物音、謀畧は密なるを可とす。念のため其所等一巡見て下され。』

軍六は澁々立つて次ぎの間を開ける。二人の押問答の間に隣りの部屋には黒い影が、私と他の部屋へ忍んだとも心づかず、

『何が居るものかい、世界は今死の國ぢや、安堵さつしやい。』
彼の黑影はこの時又二人の部屋の襖近くへ忍び寄つた。

軍六は鴉之介の身體を掻き抱くやうに近う寄添うて、

『斯うして俺が其方の手段の先きを見越して力を藉さうと云うて出たからにや、其方が胸の治まるやう、屹度荒料理して見せるが、したが、その何ぢや、俺にも些つと頼みがあるが、聞いて下さらうのう。』

鴉之介は大方落ちこゝであらうとは、軍六の顔を見た時既に思つたことであるが、相手が煩惱の暗に馳狂ふ盲目犬であるだけ、それだけ其事は此方の計畧が施し易いわいと、早くも臍を固めて、笑みをさへ湛へ、
『何さま、吾等が一期の恥辱を雪ぐ片腕ともなつて呉れる御前様身になふことなら何なりと……。』

「叶へて遣ると言やるか、それさへ聞けば勇氣百倍ぢや。鴉どの、もう夜の明けるに間もあるまいで、明け六ツの鐘までこゝにゐて、俺等が智慧分別の有りたけを藉さうぞ、」と軍六は蟒蛇のやうな眼を細めて、鴉之介の雪の額に見惚れ入つた。

(一一一)

先きなるは水の滴るやうな若衆姿、後なるは編笠を小脇に脚絆草鞋の武者修行出立、言ふまでもなくこれは鴉之介と綱千代である。

「昨日は思ひがけぬ病で折角の客人へ對面も得せなんだが、聞けば何う

やら暫くは此の院へお留りもあるとやら、すりや私も弟一人持つた思ひ、今日はその親昵に、中堂、四明、無動寺あたりへ案内しませう。』といふ鴉之介が軍六から藉りた智慧の計畧の第一歩。それとは露ほども心づかず、綱千代に何かな變つた馳走と思ふ矢先とて、院主を初め老僧役僧ども、皆な鴉之介が思ひ立ちを結構上々として、酒枝、割籠、菓子、茶など支度十二分に調べ、坊主數多供に引き添はせて、斯くは境内を練り歩くのである。

綱千代は昨夜眞夜中物音に刀おつ取り固唾を呑んで待つこと暫し、やがて思ひがけない太兵衛が四邊に眼を配りながら忍んで來ての注進に、

木村長門守

且つは驚き且つは憤り、今日鴉之介が境内案内の途中云々との計畧を残らず聞き知つてゐるので、身に寸毫の隙も見せず、中堂、薬師堂と順拜して大講堂の廣椽に憩ふ間も、卯の毛で突いたほどの油断はない。斯くて再び峻しき艮路を辿ること十六丁、やがて四明といふ所に着いた。煩惱障の雲消えて四方の展望明かなれば、四明が嶽とは申すとかや。西南は平安の帝都、碁盤の眼の如き千門萬戸、東北は琵琶の湖、沖に小さき竹生島、手を伸ばせば撮み上げも出来よう。綱千代は堅田の里の恩師の家や何所と、少時は我れを忘れて眺め遣つた。

「御覽なされい、あの男山の彼方の浪華のお城、御身も吾等も聽ては同じ御恩の下に忠勤を勵む身、はからずこゝに辭かはすも不思議の約束でござりませぬか。これからはお心おきなく、兄と思はれ、弟と思ひ、浪華のこのよしあしにつけ、隔てなく語らひたいものでござる。」と鴉之介が打ち解け顔に言ひ寄るを。綱千代は只だ首肯いて見せる。鴉之介は時機こそよけれと阿闍梨に向つて、

『のう、院主さま、足も大分疲れ、お腹もどうやら北谷でござります、何所ぞで割籠開きませうか。』

と見れば辨天堂の上、日蔭に山の涼風流れて、疲勞休めの酒宴に恰好の場所、辨覺初め坊主ども先きに參つて、早や主客の座席をととのへ

た。

梅と櫻を両手に眺めた阿闍梨は、只だほく／＼とほくそ笑みつゝ、
『皆のもの、今日は無禮講ぢや、何なりと面白可笑しう燥いで座を持た
せい。』

かう許しが出たので辨覺初め酒に眼のない蛸坊主、名に相應しく紅う
ならうぞやと、飲むわ、飲むわ、日割の稲田が水を吸ふやう。飲んで
罪のない浮世坊主が隠し藝、また濁聲の唄が出る、踊りを踊る。御堂の
内の辨才天も時ならぬ浮いた浮いたにツイ浮かされ、御廟の節穴から私
と覗かうも知れぬ。

一頻り、浮かれ騒ぎの鎮まつた時、鴉之介は親しげに綱千代の袖を引
いて、

『のう、お客人、いや綱千代どの、最前言ふた兄弟の盃、幸ひござる院
主様の前で、酌み交さうではござらぬか。』と早や盃を綱千代の前に置き、
酒枝ひとつ取り寄せてなみ／＼と注いだ。並みゐる坊主どもは、梅と櫻
の競ひ酒、この盃事見残しては冥途の障りにならうぞやと、とろんこの
眼を据ゑた。

『ひとつ参りませ、そしてその盃こちへ、』と鴉之介は何の咽喉かすめて
出すのか、鶯が谷の戸出るやうな優しい聲で、首さへ傾げて言ふのであ

つた。

三拜して頂戴するかと思ひの外、綱千代は冷やかに盃を見やつて、『この盃、綱千代は辭退申さう。』

青天の霹靂、坊主頭に電光が走つたほどに並みゐる者は吃驚した。

『なんと仰せある、綱千代殿そのお言葉今一度確と承りませう。』鴉之介が口の邊ビリ／＼と筋肉が躍つた。

『聞きたいとあれば何度でも、この木村綱千代は、御身長曾我部鴉之介殿の差す盃、受けられぬと斯う申すまでぢや。』

『何故、何故に受けられぬ。』

『何故にとは道理がましい。心底知らぬ御事など、兄弟の契り結ぶは、綱千代心が厭ぢやと申す。』

『な、な、なんと。』鴉之介は迫き込んで片膝立て。

『ま、ま、待つた、待つた、』と、祐海はこの時初めて夢より醒めた形、

『綱千代どの、言はしやるも一應道理、なれどこれは遊山の酒宴の場ぢや。』

『なるほど、これは遊山の酒宴の場ではござるが、この盃強ひすと其方へ納められたが、鴉之介どの御身の爲でござらうぞ。』

『な、な、なんと、重ね／＼無禮の言ひ條。院主の取りなし退けたから

には吾等が相手ぢや、何故此の盃此方へ納むるが身のためぢや、それから聞かう、承らう。」

『はゝゝさても強情な。某がし斯ほどに御身の爲を云ふのも、最前僞りにもせよ大阪城を望んであの辭がしほらしさにぢや。それを押し強くも意地を張る。さらばその酒人間の飲めるものか飲まれぬものか、先づ御身毒見せられい。』

圖星を指されて鴉之介、さては計畧の裏搔かれたか、はや是れまでと腰なる刀抜く手も見せず斬つてかかるを、何猪口才など綱千代ヒラリと身をかはし、電光石火持つたる、鐵扇で相手の手元ハッタと打つ。大力

に打たれてカラリと取り落す刀を、谷間を臨んで蹴つ飛ばす機敏の働き鴉之介は残念とばかり組みつき来るを、態と大手を擴げて組みつかせ、ウンと一揉み、難なく足下に振り倒して、

『サア、動けるか、動いて見よ、』と武者草鞋で肩先ぐいッ。今一息、鴉之介が胸板、あはれ踏みも碎かれよう。

夢より醒めて又夢に入る心地の祐海、現ともなく夢ともなく、綱千代が足に這ひ縋つて、

『待つたり、待つたり、綱千代どの、こゝは佛地ぢや、殺生禁斷ぢや。』
『はゝゝゝ、佛地か殺生禁斷かそこは知らぬが、そもこの不敵の鴉之介

某がしばかりか御坊にも遁されぬ讐敵じやぞ、然もその悪事思ひ立つたは昨夜の丑満時、某がしはさる人の報知によつて知るを得たが、御坊は今今まで知らなんだであらう。昨夜真夜中過ぎて某がし寝つかれぬまゝ、枕の耳を擡ぐる途端、怪しき物音に曲者かと、身がまへて心待ちに待つ所へ、さる忠義の者あつて、云々との注進に、驚き知つたる此奴が悪計。彼の軍六が淺猿しき化道の慾念貫かんとて、某がしが此の院へ参つた爲め、最早や院主の寵は失せたりと、誠にやかに畏かけるを、愚かの鴉之介眞に受けて、既に燃えかけ居つた淺猿しき嫉妬の薪に油をかけ、遂にこの謀計を謀じ居つた。謀計とは、それ其所にあるその酒ぢや、そ

の酒には砒霜の毒藥を調じてある、今日兄弟の盃事にことよせて先づ某がしにそれを飲ませ、其盃を又言ひこしらへて御坊に飲ませ、同じ術を以て手に立つ若大衆等をも亡き者に致し、お山の金銀財寶奪ひ取つて、軍六めと二人落ち行かん手筈。何と御坊御事身慄ひが出ようかの、と言葉の切れ目切れ目に力を入れる機勢で、足下の鴉之介はぐいッぐいッと踏み揺られる磐石の責苦。

「苦しいッ苦しいッ、殺せ、殺せ」と見苦しき四苦八苦。

「これほどの苦痛に得堪へぬ弱虫が、よくも一山鑿殺を企て居つた。したが御坊、そも鴉之介がこの姦計の大罪、御身にも半ばは被ようぞ、邪

淫といふは女色ばかりか、龍陽の醜態は外道の法とはお知りやらぬか、見目よき稚兒を寵愛して、法の身にあるまじき慾念満たせばこそ、斯かる怖ろしき嫉妬に落つる腐れ女の如き少年に生るゝ。某がしを昨日迎へたるも、必竟はさる淺猿しい慾念からであらう。この木村綱千代は眞個一個の男子ぢやぞ。分別盛りの御坊の年齢で、穢れたる白いもの面に塗つて媚を銜ふ女子の如き腐腸漢と、この綱千代と見分けがつかざりしか。まつた鴉之介もよつく聞け、おのれが心の淺猿しきに他を紂度なし、穢ららしい俗入道の寵を奪ふなど、疑ふな、こりや御坊、佛地ぢや、殺生禁斷ぢやといふからに、血を流すことだけは思ひ止まらう。罪人を成敗する寺法もあらうに依つて、大切の罪人御身に預くる、慾念に心を暗まらずと成敗せい。』言ひ給つて鴉之介が横面ハツタと蹴つけ、一同ズラリと睨め廻はして、編笠小脇に悠々として麓へ下る。その豪勇に氣を吞まれて、何れも縮み上つて只だ見送るばかりであつた。

(一一三)

悠々として綱千代の立ち去つた後、役僧、若大衆等三十餘人、暫くは只だ茫然と突立つてゐたが、懸て我れに歸ると、
『おゝ、この不敵の大悪人め、』と寄つて集つて鴉之介を早や高手小手に

縛めた。祐海は何と詮術も知らず、只だおろくと右往左往、斯うなつては平素の權柄もあつたものにあらず、此所先づは腕節の強いもの勝ち。

「身共は一走り先き、軍六めをふん縛つて呉れよう。我れと思はん者續いた、續いた」と今辨慶の辨覺は向ふ鉢巻キリ、と締めた。他の坊主ども、ソレツとばかりに輪袈裟を早速の片襷、念珠は大方投げ捨てた。

院主の留守を我がものに、此方居残りの軍六、咽喉の鳴るまゝはんにやたうを、尻の穴から筒ぬけるほど喫つて、「鴉どのは今に吉左右を……あゝ酔うた〜」と大盃枕にそのまゝゴロリと横倒し、後白河の夜

船の中。

色の白い、眉の美しい稚兒若衆が、四邊薄暗の裡に忍び寄つて、「軍六どの、いかい待たせました、もうこれからは二人の天下ぢや、さ、かうお出で」と滑らかな手を出す。「はい、はい」と胸を躍らせて節くれ立つた腕をなやして差し伸べる。「おゝ、こりやきつい、さう握り締めいでも、痛いかな、痛いかな」と消し飛ぶほどの痛さに眼をバツチリ、

「こりや何うちや。」

夢から現へ續き慕、場面一變して、前幕の兄上様、早やこゝで現にふん縛られたとは、さても儂ない夢の道行。

『こりや何うちや、』とまだ呆れ顔の軍六が横面、頬桁も碎けよとばかり、辨覺が辨慶力で平手打ち、

『あいた』

『おのれ、まだあいたいと惚けくさる、』と又ビシヤリ。

斯くて彼の鴉之介が歸りつくのを待つて、兩人は役僧等が僉議の白洲へ引き出し、惡計の條々逐一白状させた。叩き殺しても慊らぬ奴ぢやが、如何に末世末法の山寺でも罪人の仕置は上への申譯、他山への聞えもあるので成敗は京都所司代に預けねばならぬ。今日はもう日が無いから、明日早明辨覺初め屈強の者數多護衛して、所司代の下へ引き渡すと云ふ

ことに衆議一決して白洲は閉ぢられた。兩人はそのまゝ別々に座敷牢へ押し籠められ、寺僧三人いとも嚴重に張り番をつけた。

『やれ〜、今日はこの寺開基以來の好い稚兒若衆が、二人揃うての山遊びに、俺等切めても眼の保養ぢやと出掛けたに、ツイひよんな始末になつて了うた。ほんにあの聲で蜥蜴喰ふぢや、なまいだ〜。』

『したが、院主様はえらい力落してぢやわい。それもその筈、祇園で流る唄の文句ぢやないが、兩手に花の梅櫻を、虻も取らず、蜂も取らず、眼に入つても痛うない鴉どのは咎人で明日は所司代引渡しぢやものなアほんに院主様の身になりや、浮世を今一度心から棄てたいほどぢやらう

テ。

『それはさうと、他の奴等は、山で飲んだ酒は氣味が悪いに、かて、加へてあの騒ぎぢやというて、飲み直しの酒を先刻から勝手に喫うて居るに、俺等だけ斯うして張り番は、ほんに坊主の頭ぢや、いうに結はれぬほど小腹が立つぢやないかいやい。』

『まあ、さう怒るまいぞ、俺等はそれを思うたに依つて、夜更けて飲まうと、よう利く酒をちやアんと納戸へ取つてあるわさ。』

張り番の坊主どもは欠仲交り愚痴交りに、雑談に時を移した。

斯んな騒動の間にも、彼の新參の飯焚き男實は綱千代の家來今岡太兵

衛は忠實やかに立働きながら、總べての様子を探つてゐる。昨夜夜中過ぎに厠へ這入つてゐると、何者とも知らず厠の横をこつそり通つて方丈の裏へと廻はる様子に、此奴怪しと直ぐ様後をつけ、忍んで聞いた彼の悪計、占めたとばかり、晝間見覺えておいた綱千代の部屋へそのまゝ、注進、先づ問者の一分は立つたと大喜び、なほも油断なく立ち廻はつてゐるうち、今日四明が嶽で主人が手のうち、家來としてこれが喜ばずにゐられうかと、他の飯焚男とはそれとなき笑談口を利いてゐた。主人綱千代は無事下山、張本人の鴉之介、軍六は明日所司代へ突き出されて何れは絞首。もう之れで佐々木に仇する奴も先づ根が絶えた譯、いざ飯焚

き男もお暇ちやと、夜の更けるを待つてこつそり庫裏を忍び出た太兵衛、裏の竹藪へ隠して置いた脇差取り出して悠々と山を降つた。仰ぐと天は墨を流したやう、暗さは暗し眞の暗に、意地悪や、大粒の雨がポツリ、
い。

「まだ坂は中途ぢや、こりや困つた」と太兵衛は途方に暮れたが、不圖思ひ出したのは、昨日山へ登る坂の途中に古びた御堂のあつたことである。それへ這入つて暫しの雨宿りと、爪先探りに岨路を漸く御堂まで辿り着いた時には、おどろくしい空の遠方で雷さへ鳴り出して、今にも篠つく雨が来さうである。

「此所まで来ればもう大丈夫、濡鼠になつて歸り、殿様に笑はれるも餘り酔興過ぎる」と獨言ちながら、最初は椽に腰をかけてゐたが案に違はず礫を投げるやうな音して大雨がやつて来たので、太兵衛は急いで御堂の中へ駆け込んだ、扉を半開きにして、早く雲が断れて呉れ、ばよいと、暗の空を仰いでみると、今自分の降りて来た坂路を、どうやら此方へ人影の辿り来る氣配がする。この眞夜中過ぎに、てつきり曲者であらうと、太兵衛は竊と扉を内より締めた。憂然たる音が土砂降りの雨の中にもハツキリと聞えた、鍵が無うては外からは開けられぬ、俗にいふこつとりが自然と降りたのであつた。

人影は御堂間近になると小走りに馳せ寄つて、『どえらい降雨ちや、』と
呟きながら椽に上つた。その聲どうやら聞き覚えがあるげな。

『首尾よう脱け出して来るかなア。外では又斯う呟く聲がした。太兵衛
は聞き覚えのある聲の主をあれかこれかと心に探つてゐるがまだ思ひ當
らぬ。雨はなほも降りまさつて椽にも飛沫に堪へられぬか、外なる人は
扉に手をかけてウンと引いた、『折悪う閉つて居るわ、小腹の立つ、』と二
三度強く引き試みたが、腹立たしげに舌打ちと共に罪もない扉を小突き
居つた。

太兵衛は此の時辛つと曲者の誰れなるかを思ひ當り、我れながらたつ

た昨夜の聲を聞き忘れてゐたかと心を叱りながら、いよ／＼息を殺して
忍んだのであつた。それとも知らぬ曲者は、『え、まよよ、濡れて待つ
のも時に取つて床しいわい、』と愚痴ぢや、ら、惚けぢや、ら。斯くてや
ゝ暫く聲も立てず音も立てず、雨の中に夜は益々更け渡つた。

『お、鳩どの、待つたぞよ。』

『軍六どの、先づ安堵した。』

『もう大船ぢや、安心さつせい。俺等が運はまだ盡きぬと見えて、張り
番の奴等は揃ひも揃ふた酒飲ひ、小坊主騙いて御事に一筆かいた時の嬉
しさ、軍六浮世に染々嬉しいと思ふたは前後生涯あればかりぢや。しだ

が御事、これから二人何所へ落ちようにも、それ先立つものはぢや。名古屋山三が、洛中の風流三味も小判が無うては、色男金と力はぢや。いつその腐れ、俺は一番昨夜御事に約束した荒料理を、これから行って遣つてのけう。そいて金銀財寶俺がに持ち切れるだけ持つて来よう、道行きはそれからぢや。

『私も今日お山での無念を、えゝ斯うなりやもう誰れにでも晴らして呉れるわ。』

『さうよ、坊主憎けりや袈裟までぢや、はゝゝ、今日晝間酒飲うてゴロ寝の夢は、一時破られてとえらい目に遭うたが、斯うなつて見りや萬更

逆夢でも無かつたげな。何は兎もあれ寸善尺魔ぢや、鴉どの、出掛けようぞ。』

二人は又もと来た路を急ぎ足に引返した、

二人が路の一二丁も行つた頃、太兵衛は私と御堂の扉を開いて四邊見廻はし、『この太兵衛どのは何所まで運が強いのおやらう、』と天地の神々別けても男山弓矢八幡を伏し拜んで、是れも坂路を取つて返した。

(一四)

飽腹酒を飲つて無明の暗に酔ひつぶれた鏡月院の坊主ども、叩いても

擲してもいつかな眼を覺ましさうにもなく、本堂、客殿、方丈、納所、庫裏、人は在れども無人の曠野に等しい。その中にたつた一人院主は、絹夜具に包まれて寝ながらも眼は閉ぢられず、心は夢路を辿られねば、椽栗眼をバチクリ天井見詰めて、時々慄へを帯びた吐息を五色に吐いてゐる。

『何とも思つても可哀相でならぬ。役僧達が眼前に見た罪を院主の俺ぢやとて、何う庇ひ立てする術もない。さりとて惨たらしい絞り首にされると知つて所司代へ引き渡すやうなら……』と阿闍梨は獨言ちながら、大豆のやうな涙をポロリ、とこぼしてゐる様、恰度鬼あざみに驟雨が

降りかゝつたやうである。四ツの鐘、九ツの鐘も愁きの涙の中に聞いた。もう八ツの鐘も追つ付け鳴るであらう。

『院主さま。』

阿闍梨は夜具跳ねのけてガバと起きた。

『はてな、』と暫く耳を澄ませて、『いや、心の迷ひぢや、迷ひぢや。張り番の厳しい牢舎をどうして出て來られよう、』とグタリと身體を落とす。

『院主さま、こゝ開けて。』

『さては、』と阿闍梨、轉げつ轉びつはじとみに走り寄つて引き擧げるや

『おゝ、鴉、どうした。』

搔き抱いて居間に引き入れ、『まあ、どうした、ずぶ濡れぢや。』と顔を覗き込む。海棠に雨といふ比喻のそれにも増して、不憫と思ふ情の添へばにや、今宵の鴉之介が風情の花恥かしさよ。院主はもう身も世もあらぬ思ひに胸迫つて、森とばかり搔き抱くのであつた。鴉之介は院主がこの慰めを喜ぶ氣色もなく只だ打ち萎れて、

『のう、院主さま、私や口惜しい、口惜しうござります。』

『ま、ま、そのやうに言うて泣かずと、暫く氣を落ちつけたがよい。私も晝間の僉議を聞いてから後、種々と考へて居ることもある、屹度お前

の身は私が命乞ひしてやりませう。』

『いえ、私が斯うして牢舎を脱け出して來たのも、院主さまに命乞ひして貰はうためではござりませぬ。只だ一言院主さまに申上げて疑ひを解いて貰へば、もうこの世に望みのない私の身體、院主さまの前で腹切つて死にたうござります。』

『あ、これ、何を言やるぞ、お前を殺してよいほどなら、私はこの様に胸を痛めはせぬ。』

『それでも院主さまは、私が綱千代を殺した毒酒で院主さまをも殺す積りであつたといふ、あの綱千代の口車を信じておゐでなさらませうがな』

「ウム、その、それは、あの軍六めに唆かされたからちやと私は思ふと
る。」

「さ、その軍六めに唆かされたにもせよ、私に院主さまを殺す氣があつ
たと信じておゐでなされるのが、私や口惜しうてなりませぬ。あの時院主
さまも聞かしやりました通り、私は綱千代の飲んだ盃貫うて、其場に私
も毒酒を煽つて死ぬつもりでござりました。何の勿體ない、院主さまを。
只だあの綱千代めが院主さまのお心を掻き亂したのが腹立しさに、前後
の考へもなく綱千代と毒酒で刺しちがへようと思つたのでござります。
私やこのことを只つた一言院主さまに申上げ、疑ひ解けた、容すといふ

お言葉を土産に死にたうござります。のう、院主さま、お疑ひはもう解
けてか、容してやると言うて下され。」稚兒鬚から滴る雫をそのまゝ溜涙
にはふり落して、ワツとばかりに泣き伏した。

「分つた、分つた、よう分つた、其方が何で私を、うム、うム、分つた
とも、分つたとも。さ、もう泣かずと顔見しや。」

『それでは、もうお疑ひは解けたのでござりますか、お、嬉しい、院主
さま、私や嬉しうござります。』と身を慄はせて阿闍梨の膝に泣き伏した。
蘭燈影暗し。

『院主さま、それでは私は……』と鴉之介は矢庭に床側へ馳り寄り、

馬手刀取つて鞘を拂ひ、あはや我れと我が脇腹に突立てんとするを。

「これ、何をする、」と駈け寄り押へんとする阿闍梨が左の乳下、柄も貫れと突込みざま、左手に襟頸取つて振り倒し、聲を立てられては面倒と、素早く咽喉笛掻き切つた。艶麗な薄羅の衣の胸、血汐で彩られた鴉之介が、物凄い冷笑を浮べてスツクと起ち上る時、

「鴉どの、濡事と荒事の使ひわけ、軍六面白う見物したわ、」と襖を開けて、これも濡鼠の軍六がヌツと出た。「さ、此の上は寶藏の財貨が先ぢや。有象無象の片づけが事面倒になつた時、空手で飛び出すやうなへまはすまいぞ。」

二人は四邊に氣を配りながら、勝手知つたる長椽づたひ、寶藏へ行かんとする途中、厠へ通する十字廊下口、人が、化物か、二本の大口空に振り立て、よくは見えねど、天井を仰いで大口を開いた、と見た流石不敵の兩人も、思はず悚となつて立ちすくんだ。雨の夜、本堂の後ろ、寶藏の前、時も時なら、場所も場所。

軍六は鴉之介の手を私と掴み、抜き脚で後退り、院主の居間へ取つて返して、備前物の長い刀、

「此刀を持つて行かなんだが手振りぢや、」と小聲に呷く時、

「わア……わ。牛にしては奇妙な啼聲。洞穴のやうな本堂に陰に籠つ

た餘韻を引く。

『軍六どの、ありや何であらう、』と云ふも慄へ聲。

『さア。』

折しもはじとみから流れ込む生温い雨風に、影暗き爛燈、鬼火のやうにユラ／＼と搔めく。氣の所爲か、阿闍梨の朱に染まつた骸がうごめく。ミシリ……ワシリ……ミシリ……

廊下の音か、天井の音か、間伸びた、重くるしい物音、譬へば人間を三四人投げ込むほどのずだ袋を平氣で頸にぶら下げる巨人があつて、廊下の桁が折れはせぬかと用心しながら歩くやうな登音である。

『軍六どの。』

『何ちや。』

『登音が此方へ。』

『おゝ、来るやうぢや。』

(一五)

幽靈の正體見たり枯尾花、尾花が蔭の草の露でも時には鬼火と見えることもある。思ひがけない時思ひがけないものを見たので度肝を抜かれた軍六と鴉之介、一時は縮み上つたが、生きるも死ぬも運ぶくと、やが

て手に手に業物抜き連れて、院主の居間を私と脱け、長椽の此方で目釘
濕して待伏せた、とは知らずに彼の怪物、ミシリ、ミシリ……

的事と何とやらは向ふから外れる、その何とやらも寢床の中に置き忘
れて、身に糸を纏はぬこれこそ眞の赤裸々坊主が、宵にたら腹とち飲
つたお蔭で、眠たい盛りをまだ酔の醒めぬ千鳥足で、廁へ行つての歸り
途を、どう戸惑ふたか院主の居間の方へ、一步運んでは壁にもたれて一
眠り、二歩送つては又一眠りと、眠りながら歩いて來るのであつた。何
だ、怪しい牛の啼聲は、さては此奴の大欠伸か、拍子抜けのした軍六、
一足二足遣り過しておいてよく見ると、これほど酔ふも道理、酒と見て

は眼のない辨覺坊である。

「こりや、辨覺、今日は賢を立つてよくもこの軍六さまの寢込みを押へ
居つたな。」

言はれて辨覺酔眼見開き、

「うム、さう云ふは軍六、うぬ牢を破り居つたな。」

言はしも果てず軍六は抜き身の二尺三寸振りかざして拜み打ち。刀は
備前物、腕は利いたり、裸體の今辨慶二つに割れて斃つた。

「鴉どの、其方は寶藏へ行て手當り次第に詰め込んでおじや。今の物音
で有象無象が眼を醒ますと事面倒、腕の冴えて居るうちチャツと片付け

べい。」

言ひ放つて軍六は先づ書院の廣間へと來た。縦なるあり、横なるあり、頭を抱へたの、脚を屈めたの、いやもう坊主さまの寢象である。「軍六が渡す引導、閻魔の廳では通用すまいぞ」と小唄交りに唱へながら、片端からヅブリ、い。何れも泥のやうに酔うてゐるので、手足の先きをピリ、い。とさせるばかり、赤兒の首打ち落すほどの骨も折れぬ。書院を片付けて方丈へ行き、方丈から納所、納所から庫裏と、寢首を搔いて廻はつて、「はアれ、やれ」と刀の血を拭つた軍六、もう院内には鴉どの、外に人間は居らぬと思ふと、一寸一杯と咽喉佛が言ひくさる、「え、ま

よ、飲んでこませ。」晝間おのれがふん縛られたも酒のため、今期うして數知れぬ死人が出來たも酒のため、その酒の香を嗅ぐと咽喉佛が承知せぬとは如何なる因果ぞ。

「軍六どの早や草臥直しか」と鴉之介は宿直袋重げに引摺つて這入つて來た。

「その草臥直しが、まあ見られい、小腹の立つほど飲つた後で、今其所等中の銚子を集めたに只つたこの盃に一杯ぢや。」

「それ半分私に飲ませて。」

「え、もう他の咽喉堀る、仕様が無いわ。」

木村長門守

軍六が突き出す残んの盃鴉之介はグイと干して、『物たらぬのう。』
『待たれい、俺等どうでも見付け出して来ようわい。』と起つて軍六は
庫裏へ行つた。

その間に鴉之介は不圖思ひ出した院主の居間にある保命酒、これは小
早川金吾秀秋から先頃送り届けて来たもの、甘口の院主はそれを毎晩チ
ビリ、く、飲んでゐた。

『よくも斯うまで搔つさらへて飲ふたものぢや、』とぶつくさ言ひながら
歸つて来た軍六、鴉之介が手酌で今や飲まうとしてゐるのを見つけて、
『はい、抜けがけの功名は些と酷いぞや、半分私に飲ませて、か。』

『でも、これは甘いぞや。』

『甘い結構、御事の差す盃なりや、水でも酒の味がするわさ。』

『では、ひとつ。』

『ほう、も些つと注いで呉やれ、これでは舌の上にも溜らぬ。若衆が酌
はこぼすが花ぢやといふぞや。』

『え、私が飲みたいに。』

『は、今度は其方の咽喉を掘るか。』

言ひぐさ並べながらグイと飲み干して、

『慈悲ぢや情ぢやもうひとつ。』

「又なみくくと注ぐをグイと飲む。」

「軍六どの、甘い利きまするか。」

「利くわ、利くわ、五臓六腑に泌みわたる……あいた、あいた、た、た、た、こりやどうちや、腸が、千断る、あいた……ウムさては、盛つたな、あいた、た、た、た。」

「お、盛つたわさ、お前が昨日教へて呉れた通りにして盛つた。」

「おのれ、そ、その、頬桁……」と起ち上らんとしてバツタリ倒れ、手足を百搔き胴體に波うたせて四苦八苦、眼もあてられぬあがき死にを、鴉之介は冷やかに眺め、こと切れたりと見るや、院内彼方此方と馳せ廻

はり、戸障子を外して死骸に投げかけ、帯締め直してさて火を放ち、悠々として立ち出でた。その大膽さ、不敵さ、始終の様子を忍び忍んで見て居つた彼の太兵衛は、思はず身慄ひするほどであつた。

(一六)

四明が嶽で鴉之介を取りひしぎ、院主阿闍梨が外道の慾念を誡めて悠々と下山した綱千代は、再び恩師の家へ行き、事の顛末を物語らうかと思つたが、師の深謀に依つて廻はされた太兵衛が、事の次第は委しく知つてあれば、やがてその口から物語るであらう。さすれば此の身の無事

なることも自然知らるゝ譯、昨日立ち出た師の下へ、今日早や歸り行くも何となく面伏せである。それよ、七歳にして別れたこのかた、未だ一度も御目にかゝらぬ母上の安否を訪ね、又二つには大阪の近状をも精しく聞いて、我れはそれより直ちに諸國武者修業に出よう。一は以て我が武術の未熟を鍛錬なし、一は以て諸大名が大阪、關東に對する眞の心事を探り置くも他日の便宜、斯う心を決した綱千代は、堅田の里に尾花が招く振りの袂の露しげしとも知らず、唐崎の濱の眞砂路踏みしめて、坂本や大津の町々後に振り返りつゝ、何時か恩師や尾花姫に逢坂の關、通行の斷り述べ立てゝ、心はせき、脚は迅く、東寺の塔を右に眺めて、下

る伏見の川船や、秋近き夏の夕空に船唄冴えて悠々と流れゆく。積る日數の旅では無けれど、綱千代は轉た旅情の催され、恍惚として岸邊を眺めた。夕煙立ちのぼる農家の三々五々點在する所、一路悠々として通じ、遠客暮鐘の響きに送られて行くは何所の里ぞ。川千鳥啼く柳の影は暗かつた。

明くる未明に大阪に着いて、絶えて久しい母上との面會、安否を問ふも問はるゝも、かたみに顔を反けての涙聲であつた。

口にくそ十年の歲月は短い、母上を老境に誘ひ寄せた十年、思へば如何に長かつたであらう。思ひはひとつ、唐崎の夜の雨もなきに堅田の

夜風に袖時雨して、母一人一人が別れを惜しむも人目の關、わざと情無の素振りして歸つたあの時のこれが我が子か、さても雄々しう生ひ立つたことよ。

やがて綱千代は衣服を改め、巳の刻の母が出仕に伴はれて、秀頼公に拜謁を仰せつけられた。曾て母の許に在つた時、御乳母として母が出仕の折節伴はれて、御遊びの御相手したこともあるので、綱千代は主君の尊さよりも、より多く懐しさの感に打たれた。秀頼公に於かせられても年は一つ下であつたが中々利かぬ氣の當年の綱千代を偲ばれて、毎日お側に出仕してゐる者に向ふやうなお言葉をかけられた。

「父太閤恩顧の家來さへ、動ともすれば手を離れる今の時に、氣心知つた其方が天晴れ武士に生ひ立つて歸つて呉れたこと、秀頼は百萬の軍勢を有つ外様の味方を得たよりも頼母しく思ふぞ。」

「こは勿體なき御仰せ、臣不束なれど君家の御爲め、骨を粉にして微忠を奉る存念にござります。」

「其方の顔を見ると、秀頼は今一度幼時に立ち戻りたうなつた、否、あの當時の豊臣が威武を現在に盛らせて見たいぞや。」

秀頼公は思はず深い述懐を漏らされた、満座寂として聲なし。

やゝあつて、垂簾の裡ながら御母儀淀君からもお言葉があり、右京、

綱千代、母子のものは、他も羨む面目を施して退出した。

お長廊下を通つて局へ歸る途中、右京は綱千代を顧みて、今お上の御前、左斜めにすつと居並んでゐられたは、織田入道常眞殿、お次ぎの御老體は大野入道道軒殿、そのお次ぎによう肥つてゐられたは石川伊豆守貞政殿と、順々に御家老、重臣の名を教へて、

「其方も遠からず出仕せねばなるまいに依つて、折を見て母が紹介せをませう。執權職片桐市正且元殿と、内後見の長曾我部盛親殿とは、お見えでなかつたが、その方々にも追つてお親昵の御挨拶に出ませう。」
綱千代は一々意に留めて聞いた後、

「それから母上、淀様のお側にゐられたは、あれは誰様でござりまするか。」

「お、あのお方を言ひ忘れた、あれは道軒殿の長子、修理亮治長殿ぢや。」

「左様でござりまするか、」と言つたが、綱千代は心のうちで、お小姓にしては餘りに年長けたりと訝しく思つた。

局へ歸つて母子は打ちくつろぎ、茶を喫み菓子など摘んで、長閑な世間話に暫く時を移した。

「右京殿、お内にか、唐突の訪ひ失禮なれど。」

木村長門守

「これはよく、舞庭殿、ようこそ。」

「今彼方で案内の乞ふたれど、女衆の顔が見えなんだ故、お心安立てにすつと通りましたお支障はありませぬか。」

「それはまあ無禮の至り、さ、どうぞこちらへ、かねぐく煩い噂のお相手になつて貰ひましたその子息が今日戻りました、どうぞお親昵になつて下さりませ。」

「これはお言葉で恐縮、今日御殿で腰元衆が噂とりぐ、右京殿はお立派なお子を持たれたといふに、さてはとこの饗庭旅から歸つた我子の噂聞くほど嬉しうて、直ぐにもお部屋をお訪ねしたかつたが、何くれと御

用の多くて、今やうく退出しました、御覽の通りまだ出仕衣服のまゝ」
「それはまあ、御親切嬉しう存じます。これ綱千代、母が常々御親切に預る饗庭のお局様ちや、お親昵の御挨拶しや。」

綱千代は衣紋を繕ひ、一膝退つて、

「常陸介が一子綱千代でござります、此方より罷り出づべきの所お出まし下さつて恐縮に存じます、かねぐく母者が御親切に預りまする段、更めて御禮の申上げまする。」盤上珠玉を轉ばすやう、聞く耳にも清々しく述べ立つる綱千代が言辭の爽かさに、饗庭局は我が云ふ辭も打ち忘れて少時は顔を見守るほどであつた。

「老女が親昵、御事には煩はしからうとも存じたなれど、最然も申す通り右京殿とは日頃二なき御交際を願うて居りますので、お悦び申上げに参りました。さてもまあ雄々しう生ひ立たれましたわいのう。いやなに右京殿、持つべきものは子なりとやら、そもじが今日のお胸のうち、饗庭お美ましようござります。」

饗庭局が心からなる言葉に、右京は母として一種の誇りをさへ覺えるが、右大臣家の大奥に仕候する上臈として何所までも謙讓して、

「これは饗庭様、段々のお褒め却つてお恥かしう存じます。何が身體ばかり大きうして、まだ乳臭い子供でござります。何れはお表衆の末席に

も連ねて戴かうと存じ居りますが、その節は陰ながら何くれとお心添へを願ひます。」

主客の談話は段々に移り移つて、やがて綱千代が十年の朝夕を親しんだ滋賀の湖の景色のことに移ると、饗庭局は綱千代に向つて、

「御事堅田に居りやつたら北へ隣りの真野の庄のこともよう御存知である、妾、真野殿御内方とは年來親しい仲、近頃豊後殿御所勞のため一緒に真野の別館にござるが、別に變つたこともお聞きではなかつたかの。」

真野豊後とは言ふまでもなく真野豊後守頼包がことである。頼包は七手組の一人で武道の鍛錬深く、豫ねて佐々木義郷とは親しき間柄である

所から、綱千代堅田に在る近き頃、師に伴はれて兩三度訪れたことがある。

「恩師義郷、真野殿とは豫ねて交際のござります所から、私もお供して兩三度お訪ねしたことこのござります。真野殿御所勞も大方は快うなりましたれば、近きうち御歸阪なさるさうでござります。」

「左様でござりましたか、これはよいお便りの聞いた。時折音聞の使者出さうと思ひましても、兎や角と多用に取り紛れまして……」

こゝへ取り次ぎの女中が隣室まで来て、

「申上げます、只今堅田から市郎兵衛様と申すお方見えられました、今

日若殿様お戻りと察して……」

皆まで言はせず綱千代は、「母上、市郎兵衛が参つたと申しますが、何か火急の用事と思はれます、これへと申しませうか。」

「お、直ぐに通したが宜からう。」

饗庭局は禮儀を守つて、「それでは妾はお暇致しませう」と會釋して起たうとする所へ、心急く市郎兵衛は早や案内されて這入て來たので、局は鳥渡辭し去る機會を失つた。

市郎兵衛は一同に向つて會釋なし、

「奥方様、絶えて久しい御奉伺は後にて申上げます。只今は若様へ火

急の御用、』と言つて鳥渡言葉を途切らせる、右京はその意を察したが、饗庭局へ對する禮儀として、

『此方にござるは妾が日頃姉上のやうにお頼み申してゐるお方ぢや、憚りなう申しや。』

饗庭の局は益々起ちおくれた。市郎兵衛は一膝進ませて、語り出した所は斯うである。昨日未明に綱千代が堅田の家を立ちのいてから、延暦寺境内四明が嶽に於ける出來事までのことは、義郷がそれと覺つて忍ばせた間者の太兵衛が注進に依つて、一伍一什を知るを得た、然るに其口何者かあつて鏡月院の坊主を始め僧侶強力寺男に至るまで、一人残らず

討ち果たし、佛殿に火をかけて逃走した。これは若し太兵衛が生捕れることなく無事に歸つたならば、事明白に知ることが出来るであらうが、あの思慮ある太兵衛が何う失策つたか、鏡月院以外の獅子吼院、欣淨院法成就院等の悪僧のために生捕られた。太兵衛は一度隙を見て佐々木の許へ注進に歸つたが、軍六、鴉之介が如何に成敗せられるか、又法師ばらが其後如何なる行動をとるか、それを探つた上では此方にも備へがあるとして、再び忍んで鏡月院へ行つて遂に生捕られたのである。然る所右諸院の悪僧ばらは何人の奸計に陥ちてか、生捕つた太兵衛を現の證據と言ひなし、彼の鏡月院を夜討ちして佛殿に火を放つた大悪人は、佐々木